第９回日ソ知事会議
議　　事　　録

〔付〕　ソ連知事団滞在日程表等

昭和 54 年（1979 年）11 月

全　国　知　事　会

写真あり

第 9 回日ソ知事会議（11 月 16 日　於都道府県会館）

写真あり

後藤田正晴自治大臣との会見（十一月十五日）

写真あり

武藤嘉文農林水産大臣との会見（十一月十五日）

写真あり

佐々木義武通商産業大臣との会見（十一月十五日）

写真あり

加藤紘一内閣官房副長官との会見（十一月十六日　於総理官邸）

写真あり

高島益郎外務事務次官との会見（十一月十五日）

写真あり

岡田春夫衆議院副議長との会見（十一月十六日）

写真あり

NHK訪問（十一月十五日）

写真あり

奈良県みかん栽培農家（隈田嘉史郎氏）訪問（十一月十八日）

写真あり

鳥取大学附属幼稚園訪問（十一月二十日）

目　　次

第１　第９回日ソ知事会議会議次第　……　1

第２　会議出席者名簿　……　3

第３　会議概要　……　6

１　開　　会　……　6

２　日本側知事の紹介　……　6

３　議長選出　……　6

４　来賓あいさつ　……　6

⑴　後藤田自治大臣のあいさつ　……　6

⑵　松本外務政務次官のあいさつ　……　7

⑶　ポリヤンスキー在日ソ連大使のあいさつ　……　9

５　日本知事代表歓迎あいさつ　……　11

奥田全国知事会会長

６　議　　事　……　12

⑴　日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について　……　12

⑵　日ソ間の貿易および経済交流の促進について　……　12

報告ならびに意見発表

①　コズロフ・モスクワ州執行委員会議長　……　13

（団長あいさつ、ソ連側団員紹介を含む。）

②　平林鳥取県知事　……　29

③　ポドガエフ・ハバロフスク地方執行委員会議長　……　32

④　君新潟県知事　……　39

⑤　サガノフ・ブリヤート自治共和国閣僚会議議長（首相）…　42

⑥　スパンダリアン・ソ連駐日通商代表部首席　……　48
⑦　恒松島根県知事　……　58
⑧　コルイチェフ・ダリイントルグ総裁　……　60
⑨　長洲神奈川県知事　……　63
⑩　ロマキン・ボルゴグラード州執行委員会議長　……　65
7　両国知事代表閉会あいさつ　……　71
⑴　日本知事代表　西沢長野県知事　……　71
⑵　ソ連知事代表　コズロフ・モスクワ州執行委員会議長　……　72
8　閉　　会　……　72

〔付〕

1　記者会見　……　73
2　ソ連知事団滞在日程　……　75
⑴　総　　括　……　75
⑵　日　　別　……　76
⑶　ソ連知事団地方視察随行者　……　89
3　第 9 回日ソ知事会議開催に関する共同声明　……　90
4　ソ連知事団メンバーの略歴　……　98
5　ソ連知事団メンバーの州・地方・自治共和国概要　……　103
6　ソ連邦行政区画図（州・地方・自治共和国のレベル）　……　113

第１　　第９回日ソ知事会議

会　議　次　第

昭和54年11月16日（金）14：00～17：30

都道府県会館別館　211号室

（敬称略）

1　開　　会

2　日ソ両国知事紹介

3　議長選出

4　来賓あいさつ

自治大臣　後藤田　正　晴

外務政務次官　松　本　十　郎

在日ソ連大使　D. S. ポリヤンスキー

5　日本知事代表歓迎あいさつ

全国知事会会長　奈良県知事　奥　田　良　三

6　議　　事

⑴　日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について

⑵　日ソ間の貿易および経済交流の促進について

報告ならびに意見発表

①　モスクワ州執行委員会議長

N. T. コズロフ

②　鳥取県知事　平　林　鴻　三

③　ハバロフスク地方執行委員会議長

G. E. ポドガエフ

④　新潟県知事　君　　健　男

⑤　ブリヤート自治共和国首相

V．B．サガノフ

＜休　　憩＞

⑥　ソ連邦駐日通商代表部首席

V．B．スパンダリアン

⑦　島根県知事　恒　松　制　治

⑧　全ソ輸出入公団ダリイントルグ総裁

V．V．コルイチェフ

⑨　神奈川県知事　長　洲　一　二

⑩　ボルゴグラード州執行委員会議長

Y．I．ロマキン

7　両国知事代表閉会あいさつ

⑴　日本知事代表　全国知事会副会長　長野県知事　西　沢　権一郎

⑵　ソ連知事代表　ソ連知事団団長　モスクワ州執行委員会議長

N．T．コズロフ

8　閉　　会

第２　　会議出席者名簿

（敬称略）

ソ連側出席者

モスクワ州執行委員会議長　N. T. コズロフ（団長）

ブリヤート自治共和国首相　V. B. サガノフ

ハバロフスク地方執行委員会議長　G. E. ポドガエフ

ボルゴグラード州執行委員会議長　Y. I. ロマキン

サラトフ州執行委員会議長　N. S.アレクサンドロフ

チユメニ州執行委員会議長　V. V.ニキーチン

ウラジーミル州執行委員会議長　T. S. スシコフ

ベルゴロド州執行委員会議長　A. F. ポノマリョフ

ソ連邦科学アカデミー極東研究所先任研究員

B. A. ボロージン（代表団顧問）

全ソ輸出入公団「ダリイントルグ」総裁　V. V. コルイチェフ

全ソ対外友好文化交流団体連合会極東部長

S. P. ハーリン（代表団事務長）

ソ連邦駐日通商代表部首席　V. B. スパンダリアン

日本側出席者

奈良県知事	奥田良三	（全国知事会会長）
長野県知事	西沢権一郎	（全国知事会副会長）
山形県知事	板垣清一郎	
新潟県知事	君　健男	
埼玉県知事	畑　和	
神奈川県知事	長洲一二	
三重県知事	田川亮三	
兵庫県知事	坂井時忠	
鳥取県知事	平林鴻三	
島根県知事	恒松制治	
広島県知事	宮澤　弘	
沖縄県知事	西銘順治	
北海道副知事	寺田一寿男	
東京都副知事	野村鋠市	
群馬県副知事	横田博忠	
富山県副知事	巣山庄司	
愛知県副知事	鈴木礼治	
滋賀県副知事	前川尚美	
京都府副知事	荒巻禎一	
全国知事会事務総長	松島五郎	

来　　賓

自　治　大　臣　　後藤田　正　晴

外務政務次官　　松　太　十　郎

在日ソ連邦大使　　D. S. ポリヤンスキー

オブザーバー

在日ソ連大使館参事官　　G. E. コマロフスキー

同　一等書記官　　Y. I. スミルノフ

同　大使館員（大使通訳）　Y. N. ドブロボリスキー

同　大使館員　　A. V. クリフツォフ

在日ソ連通商代表部（通訳）　L. ノースイレフ

自治大臣秘書官　　湊　　和　夫

外務省東欧第一課長　　兵　藤　長　雄

同課　地域調整官　　末　沢　昌　二

同課　事　務　官　　松　崎　　潔

通商産業省南アジア東欧課市場専門官(ソ連･東欧担当)若　松　茂　三

全国市長会調査広報部長　　丸　山　　堯

日ソ貿易協会事務局長　　大久保　忠　男

ハバロフスク会事務局長　　槇　　二　郎

各都道府県東京事務所長

各新聞・通信・テレビの記者・カメラマン

事　務　局

全国知事会事務総長　　松　島　五　郎

同事務局次長、各部長ほか関係職員

〔通　訳〕

小　林　マリ子（サイマル・インターナショナル）

中　山　久　恵（日本交通公社ロシア語ガイド）

第3　会　議　概　要

1　開　　会

松島全国知事会事務総長は、第9回日ソ知事会議の開会を宣言した。

2　日本側知事の紹介

松島事務総長が日本側出席知事・副知事を紹介した。

3　議長選出

松島事務総長は、会議の議長選出について会議にはかったところ、従来の慣例とソ連側の推挙により、日本全国知事会会長の奥田良三奈良県知事が議長に就任した。

4　来賓あいさつ

⑴　後藤田自治大臣のあいさつ

本日、ここに訪日ソ連知事団団長ニコライ・T・コズロフ氏をはじめとする訪日ソ連知事並びに随員の皆様をお迎えして、第9回日ソ知事会議が開催されるに当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

訪日ソ連知事の皆様方遠路ようこそおいで下さいました。心からご歓迎申し上げます。

この日ソ知事会議も1968年東京において第1回目が開催されてから回を重ねて今回で9回と相成りましたが、その間、日ソ両国の相互理解と友好親善の発展に大きく貢献してこられたばかりでなく、地方行政に関する重要な問題について熱心に検討を続けておられますことは、私

ども地方行政に携わる者として誠に喜びにたえません。

さて、今回の議題は、「日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について」及び「日ソ間の貿易および経済交流の促進について」と聞いております。ご承知のように日ソ両国間の貿易及び経済交流は、近年着実な進展をみせ、また文化面での交流のより一層の促進も両国民共通の願いとなっております。特にわが国の地方行政においては文化の問題が非常な注目を集めていることでもあり、誠に時宜を得たものと存じます。

日ソ両国の知事各位がこのように一堂に会し、英知を集めて意見の交換、討論をなされますことは、これらの問題にとりまして大きな意義を有するものと確信いたします。

訪日ソ連知事並びに随員の皆様は、この会議終了後、京都府、奈良県、鳥取県、島根県、神奈川県の各地を視察されるご予定と承っております。

日本の現状を十分に視察されてわが国及びわが国民に対する理解を一層深められるとともに、錦秋の日本の旅を存分にお楽しみ下さることを願ってやみません。

本日のこの会議が所期の成果をあげ、実り多きものに相成りますよう念願いたしまして、私のご挨拶といたします。

昭和 54 年 11 月 16 日

自治大臣　後藤田　正　晴

⑵　松本外務政務次官のあいさつ

本日、ここに第 9 回日ソ知事会議が開催されるに当たり、一言ご挨拶を申し述べる機会を得ましたことは、私の欣快とするところであります。近年日ソ関係は経済、貿易、文化等を中心に幅広い分野において着実な

発展を遂げておりますが、日ソ間のあらゆるレベルにおいて交流を積極化することは、両国民間の相互理解の増進のため、誠に歓迎すべきことであります。この意味において、昭和43年に第1回会議を東京で開催して以来、既に第9回目を迎える日ソ知事会議が、各位のご出席の下に今般東京で開催される運びとなったことは意義深いものがあると考えます。かかる会議において、双方が共通の関心を有する諸問題につき、幅広く率直な意見交換が行われることは、日ソ両国の各地方関係当局間の相互理解の増進と関係の緊密化につながり、もって日ソ関係に寄与するものとして、この会議の役割を高く評価するものであります。

ご承知のとおり、わが国は平和外交の立場に徹し、全ての国との間に友好関係を増進し、もってアジア及び世界の平和と安定に寄与することを外交の基本としております。

わけても、わが国にとり重要な隣国の一つである貴国との間に友好関係を維持・発展せしめ、相互信頼を基礎とする安定的な関係を確立することは、わが国外交の一貫した課題であります。これは、ひとり日ソ両国民の共通の利益に適うばかりではなく、極東の平和に寄与するものと確信いたします。

日ソ関係には大きな発展の可能性が秘められていることはよく指摘される通りでありますが、国交回復後二十数年を数える今日、なお、北方領土という未解決の問題が残されており、特に最近、これら地域において軍備強化が進められるという善隣友好の精神に逆行する事態が生じており、相互理解に根ざす真に安定した関係の構築が困難な状況におかれていることは誠に遺憾なことと申さねばなりません。私は、ソ連が善隣友好への誠意を具体的行動をもって示され、一日も早くかかる未解決の問

題が解決されて日ソ関係の発展の可能性が十分に汲みつくされることを心から願うものであります。このような方向に向けて、一層の努力が払われることを期待致したいと考えます。

最後に、今次知事会議の成功と、ソ連側代表団各位の日本ご滞在が快いものであることを祈り、私の挨拶といたします。

昭和 54 年 11 月 16 日

外務政務次官　松　本　十　郎

⑶　ポリヤンスキー在日ソ連大使あいさつ

尊敬する皆様、尊敬する同志の皆さん、友人の皆さん。本日、第 9 回ソ日知事会議の参加者の皆様方にごあいさつの言葉を申し上げることを私は大変うれしく存じます。両国の地方行政機関の指導者の会議は、すでに 11 年間にわたって、ソ連と日本において順番に行われています。このような会議実施の豊かな経験が蓄積されてきた現在、この会議が両国間の他の交流関係を補完する好ましい交流形態となっているということを確認することができると思います。

地方行政機関の間の交流の発展は、お互いをよりよく知り合い、理解しあい、そしてまたアジアと全世界の平和の強化のために長期的互恵協力を確立したいというわれわれ両国民の希望を反映しております。皆さんは、これから、われわれ両国間の親善関係の一層の発展に関する諸問題とくに文化および貿易・経済協力の分野における諸問題を討議されようとしております。

私はとくに、ソ日経済関係の発展に触れてみたいと思います。周知の

ように、ソ連は、シベリア・極東地域の生産力を急速に発展させる政策を一貫して実行しております。私たちの考えでは、これらの地域におけるぼう大な燃料・エネルギー資源および原料資源の開発は、ソ日間の貿易・経済協力の発展をもいちじるしく促進するでありましょう。私たちは、ソ連と日本とは、相互に、まさに相互に、経済関係の発展に関心を持つという事実に立脚しております。時折、日本の方々の中で、経済協力についてはまず第一にこれに関心を寄せているのはソビエト側であるかのような見解を述べる人があります。このような議論は根本的に誤っております。ですから、ソ日協力は真の相互利益を基盤としてうちたてられねばなりません。

日本の実業界の中で、最も先見の明のある人たちは、すでにずっと以前から、日本のプラント、機械類、工業生産物のソ連からの大規模な受注という観点からしても、また日本にとって不可欠の原料や燃料のソ連からの買付けの拡大という点においても、ソ連東部地域の順調な経済的発展に伴って開かれてくる、日本にとって有利な可能性を高く評価しておられます。

この会議に出席しているソ連側代表団の中には、ソ連の中で日本との経済関係の発展のために最も好都合な客観的諸条件を有する地域の代表者が相当数含まれております。

最後に、今回のソ日知事会議の成功を希望するとともに、この会議がわれわれ両国間の真の善隣関係の強化ならびにソ日両国の国民の間の親善関係と相互理解の発展に寄与するという確信を表明させていただいてごあいさつを終ります。

ご清聴ありがとうございました。

5　日本知事代表歓迎あいさつ

会長　奈良県知事　奥　田　良　三

日本側知事を代表して私から一言ごあいさつ申し上げます。

本日は、後藤田自治大臣、松本外務省政務次官、ならびにポリヤンスキー駐日ソ連大使のご臨席をいただきまして、来日されたソ連邦の知事各位と日本知事のご参加を得まして、ここに第9回日ソ知事会議を開催することができましたことは、まことに同慶にたえないところでございます。

私はソ連邦知事各位が極めてご多忙のところ、とくにまげて、このたびわが国を訪問せられましたことに対し、深く謝意を表しますとともに、心からご歓迎を申しあげます。また、一昨年7月に私が団長をつとめて日本知事代表が貴国を訪問いたしましたが、その節はまことに心暖まるご接待をいただきましてまことにありがとうございました。厚くお礼申しあげます。

さて、日ソ知事会議は、1968年にはじめられまして、今回で9回に及んでおります。その間、各種の問題が討議されて参りましたが、いずれの回におきましても、その中心的課題となりましたのは両国の親善ということでありました。親善が互恵的協力のうえに成り立つことは申すまでもないところでありますが、お互いに、相手国の実情をよく理解して更に一層の親善の実をあげますことが必要であると思います。

ところで、日ソ両国は社会体制のうえでは互いに異っておりますが、地方行政が住民の福祉の増進を目指して努力しているということに関しましては、両国とも同じだと考えます。また体制が違うが故に、かえってお互いに学ぶべきものが多いに違いないと存じます。そうした意味からも、日ソ両国の地方行政を担当する責任者が、こうして一堂に会して、意見を交

換し討議を重ねるということは、まことに意義深いものがあると存ずるのであります。

なお、先程の外務次官のごあいさつにもありましたように、日ソ間には国交回復後、今日なお未解決のまま残され、日本国民がひとしくその早期解決を期待している北方領土問題がございます。

ソ連の知事各位におかれましては、日ソ両国の平和友好関係をより増進するため、その解決に格段のご尽力を賜わりますようお願いいたします。

おわりに、私はこの日ソ知事相互訪問に対し、日ソ両国民がその成果に大きな期待をよせていることを思い、本日の会議と地方の行政・産業等のご視察が日ソ両国民の相互理解と友好親善を一層深め、両国の発展に貢献するものと信ずるものでございます。

本日の会議が、ご列席の各位のご協力によりまして所期の成果をあげ得られますよう、切に希望いたしまして私のごあいさつといたします。

ありがとうございました。

6　議　　事

奥田議長より、本日の日ソ知事会議の議題については前もって両国間で協議の結果、「日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について」と「日ソ間の貿易および経済交流の促進について」の二つのテーマについて討議すすることになっているので、これからこの二つのテーマに関して両国代表の報告ならびに意見発表をお願いすることといたしたい、旨発言があった。

①　コズロフ・モスクワ州執行委員会議長

（あいさつ）

尊敬する議長、尊敬するみなさん、同志のみなさま。

私はソビエトの代表団を代表して日本の全国知事会に対し、今日、日本の知事との第９回知事会議に私たちを招待してくださったこと、また隣国である日本の皆様に暖かくもてなしていただいたことについて心からの感謝を申しのべます。

ソビエト代表団は、今後のソ日関係の一層の発展と強化という意味で私たちのこの第９回知事会議がすばらしい貢献をするものと期待しております。

報告にうつります前に、まず私どものここにおります代表団を紹介させていただきたいと思います。

ブリヤート自治共和国代表　サガノフさん

ハバロフスク地方知事　ポドガエフさん

スターリングラード州知事　ロマーキンさん

サラトフ州知事　アレクサンドロフさん

チュメニ州知事　ニキーチンさん

ウラジーミル州知事　スシコフさん

ベルゴロド州知事　ポノマリョフさん

ソビエト科学アカデミー極東研究所の研究員

ボロージンさん

ソビエトのダリイントルグの代表者

コルイチェフさん

対文連極東部長　ハーリンさん

（報　告）

両国国民の平和と友好の強化のために善隣関係および協力を発展させることにおけるソ連邦の地方・州と日本の都道府県の地方当局および民間団体の役割について

ソ連知事団団長

モスクワ州執行委員会議長

N. T. コズロフ

尊敬する議長さん！

尊敬するみなさん！

同志のみなさん！

私たちの会合が定期的な性格をおびていることに喜びを感じます。約11年前の第1回会議から、またそれに続くすべての7回の会議において、双方は平和と国際安全のため両国間の善隣関係と協力の一層の発展に全力るつくす固い信念を表明してきました。

この11年間に世界では肯定的な動きが起りました。

国際環境においてデタントといわれる傾向が定着しました。1940年代の終り頃から人類に迫っていたロケット＝核世界戦争勃発の危険は減少し、恒久平和の維持の見通しは60年代の終りより好転し、より信頼できるものとなりました。

ご承知のように、まさにこの期間に、ヨーロッパにおける戦後の発展の現実に応じた国家間関係を導いた一連の条約が調印され、また最初のソ米戦略兵器制限協定と、ソ連邦とアメリカとの間の相互関係の原則的基本協定とが締結されたのです。

ヘルシンキにおける35か国の指導者による歴史的な会議は安全と協

力の確立の面におけるヨーロッパでの発展を文書的に確認しました。長期にわたる真剣な交渉の結果、ソ米の間に戦略攻撃兵器制限条約（ソルトⅡ）が準備され調印されました。この条約は、最も危険な兵器についての軍備の効果的な減少を目的とし、軍縮問題解決への重要な前進の第一歩となるでしょう。

知事の皆さんはとどまるところを知らない軍拡が平和の事業にとっていかに危険であるかをはっきりと理解しておられると確信しております。軍国主義はそれを生み出した社会を不具にするだけではありません。戦争を準備する機械は嫌悪、恐怖、暴行という排気ガスで地球の政治的大気を害しています。ですから多くの国において国際緊張緩和の擁護者と反対者との間で闘争がくりひろげられているのです。そして勿論、私たちはこの闘争において傍観者でいるわけにはゆきません。国民は完全な安全と相互信頼に立脚した、確固とした平和を欲しているのです。この平和は進歩のために広範な国際協力の道を開いています。

平和は貴重な資産です。いずこでも流血のないことを知る生活、自分の家の屋根に明日爆弾が炸裂しないという確信、年配の世代が体験した悲劇と苦しみを子供が経験しないで育つ確信。これらはすべては巨大な福利です。

しかし平和とは安全問題だけではありません。それはまたいかに複雑で困難であっても現代文明の最も大きな問題の解決のための最重要な前提です。そして人類の未来はそれに関連しているのです。

エネルギー資源の不足、環境の汚染、あるいは大衆的飢餓、多くの治療困難な病気といった現象を含むいくつかの問題については世界の多くの人々がすでに今日心配していることをここで指摘するだけで十分でし

ょう。世界の海洋の富をいかにしてよりよく開発するかを私たちは他の人々と共に考えています。

これらすべては政府、自治体、経済界、学術界の代表の全面的な誠実な実務的な協力と(そして勿論広範な民間団体の参加)を必要とします。ソビエトと日本の地方自治体と民間団体のここでの役割は私たちの考えでは非常に大きいと思います。

科学と技術の広範な発展は現代社会の重要な特色の一つです。科学はますます国際的なものとなりつつあります。恒久平和、地上の自由と進歩の事業のためのわが国の全般的な闘争と切り離せない部分となったのは、国際的な経済的、科学・技術的、文化的関係の発展です。これらの分野における組織的な交流は、相互利益のもとにのみ一層の発展をみることができます。

私たちは知事の皆さんとともに、社会において顕著な地位を占めています。そこで皆さん、私たちは両国民間の善隣関係の強化のうえで、また両国間の経済と文化関係の発展、国際情勢の健全化において必要な貢献をしているでしょうか？　この問題で肯定的な返事をだすためには、ここでまだまだ多くのことをなさねばならないでしょう。これに関連して、私は北方領土問題にふれたいと思います。両国間の領土問題は第2次世界大戦終了時に解決済みであり、われわれにはこの問題は存在しません。でありますので、私共はこの問題の討議は行わないよう希望いたします。私たちは両国民の相互関係改善のため、世界のデタントの深化のため、経済的、科学・技術的革新が国民の福祉と人類の緊要な問題の解決に向けられるのを促すために自己の影響力をはば広く利用できるし、また利用しなければなりません。

ここに二つの例をあげてみましょう。今年の9月にハバロフスクにおいて約50の国と地域を包括する地域的非政府組織である太平洋科学者協会の第14回太平洋科学者会議が開催されました。

それより少し以前に、極東のナホトカ市において27か国からの学者と社会活動家が参加した太平洋沿岸地域協力問題に関する第5回青年研究家セミナーが行われました。

会議とセミナーにはもちろん日本の学者も積極的に参加しました。

多くの国の学者と広範な社会活動家の太平洋地域へのこのような関心は決して偶然ではありません。世界におけるこの地域は重要な地位を占めています。とくに、太平洋の真に無尽蔵の生物的、鉱物的、エネルギー的資源の急速な開発は、栄養失調、飢餓の問題、国際的な独占が人工的につくりだす燃料と資源の不足問題を現実的に解決し得ることを世界の諸人民の前に示します。それと同時に、広大な太平洋地域での人間の積極的な活動はその生態系への脅威をうみ、環境保存と保護の緊要な問題を提起します。

またこのような協力は、恒久平和、確固とした国際的安全保障、国民間・国家間の相互理解と信頼の雰囲気のうちにのみ可能なのです。

「太平洋地域における正常な関係は、科学研究分野における実り多い協力の重要な前提である」と会議の決議の一つはいっています。

これらの国際会議の参加者である各国の学者と社会活動家たちは、核兵器のこれ以上の拡散に断固反対し、太平洋地域におけるその使用禁止に向けられた諸対策を支持しました。

ソビエトの人々はこの学者のフォーラムの決定を熱烈に支持しています。というのは、これは今日の要請にこたえているからです。

残念ながら重要な国際問題でこのような態度をとっているのはまだまだすべての国々だとは言えません。民族間に憎悪と敵意を植えつけることの否定、戦争宣伝の禁止を例にとってみましょう。これは緊張緩和政策を確信し、また世界における健全な政治気候の形成を志向するそれぞれの国にとって最低限度のものであるといえるでしょう。

1947年にすでに国連総会において新しい戦争宣伝に反対する決議が採択されています。それから30年をこえる年月がすぎさりましたが、今日、このような宣伝はされていないと誰が断言できるでしょうか？多くの一連の国ではそれはいまだに禁止の条項にさえ入っていません。ソビエトにおいてはすでにとうの昔にそれがなされています。「ソ連邦での戦争の宣伝は禁止される」という規定が国家の基本法である私たちの憲法に定着しています。私たちが今日このことをあえて述べているのは、人々が戦争と軍拡の範疇で物事を考えることに慣れるようしむける勢力がまだまだ積極的に活動しているからです。

武力紛争をもてあそぶのが常套手段となりつつある国ぐにがあります。これみよがしに、事態はどのように展開しその際にはどれだけの犠牲が生じいくつの都市が壊滅するだろうと計算をしたりしています。数千万あるいは数億の生命の犠牲が計算されるという無情な算数をぶちまけています。

人間にあるすべての良いこと、すべての人間的なものを称揚するかわりに、人間を袋小路に追い込むような神話を考え出し、彼らが理性を信用しないよう吹きこんでいます。戦争は回避できないもののように描き出しています。

このような神話をなんのためにつくりだし、彼らがどのような政策に従

っているかははっきりしています。私たちの国のすべての社会層の義務は、これらの神話のすべての偽りを積極的に暴露し、人類の歴史上いまだみたことのない悲劇を防止することにあります。

国際舞台における現代の情況の困難と矛盾は、国家間の緊張と紛争の火種が消えないだけではなく、時として新しい火種が燃えあがる原因を作り出しています。アジアにおいてもこのような火種は一つではありません。ですから、私たちの観点では、アジア大陸にも緩和を広める時がきています。

政治的、経済的その他のすべての重要な国際問題の解決のために、平和な状況が何をさしおいても必要なのは周知のことです。わが国の態度は、ウイーンにおけるカーター・アメリカ大統領との会談の際にL. I. ブレジネフによって余す所なくはっきりと述べられました。会合が示したように、もし希望さえあればいかなる国でもソビエトとの間に国際緊張緩和と平和のために相互に受け入れられる解決策と協力を見つけだすことができます。ソビエト国家の外交政策方針が明瞭に証拠だてたように、平和はつねに私たちの理想であったし今もまたそうであります。

国際緊張緩和の進展が一定の国の軍国主義層を狂乱へと導いています。この層はきまってかげにかくれようとし、色々な型の荷札を他人につけることをはばかろうとしません。

「覇権主義」という名辞でごまかすのも一つの例です。覇権主義あるいは支配についてのソビエトの態度はまったくはっきりしています。ソビエト国家はその樹立の最初の日から一国の他国支配に断固反対してきました。

世界支配を確立しようとするヒトラーの計画を覆滅するために、ファ

シスト的覇権主義を葬るためにわが国民は2,000万人の生命を捧げたのです。この一つの事実をとっただけでも覇権主義に対する私たちの態度は理解できるだろうと思います。覇権、すなわち国際関係における力の悪用への道を阻むために、すべての国家が覇権主義に対してハッキリとした態度をとる時がきました。

この気高い目的をもって、ソビエトは本問題を今回の国連総会の日程にのせるよう提案し、また「国際関係における覇権主義政策の禁止について」の決議案を審議に付したのです。

この提案の意味は、いかなる国家あるいは国家群も、いかなる事業またいかなる理由によっても国際的な事柄でヘゲモニーを求めるべきではなく、世界全体であってもあるいはいずれかの地域であっても支配的状態を志向すべきではないということです。

ソビエトの新しいイニシアチブは、すべての国民の緊要な利益に応え、人類の平和への期待を表わしています。それは、緊張緩和と平和のため平等を基盤として国際問題の処理にアプローチするすべての人びとから肯定的反響を得るべきです。

先月ベルリンで発言したソビエト国家の首脳L．I．ブレジネフは新しい非常に重要なイニシアチブを提案しました。

もし西側諸国がヨーロッパにおける同等のミサイルを増さなければソビエトの西方地域に配置されている中距離核ミサイルを現水準に比較して削減する用意があり、中部ヨーロッパのソビエトの軍隊とくに向う12か月にわたってドイツ民主共和国の領土から2万人のソビエトの軍隊と戦車千台ならびに一定数量の他の兵器を一方的に撤去する用意があるむね宣言しました。核兵器の生産と保有を拒否し自国の領土にそれをもた

ない国家に対してソビエトは絶対に核兵器を使用しないことを厳粛に声明しました。ソビエトは他の国ぐにと協力して、信頼性の一層の増大と戦争の危険減少に向けられた追加的な対策を実施する用意があります。

今日の時代の最高の英知は、核戦争の危険を強めることではなく、人類を新しい戦争の脅威から解放することにあります。

ソビエトについていえば、ソビエトは自己の義務を忠実に履行しています。ソビエトは軍拡に反対し、すべての形の兵器の生産の削減と停止のため、国際緊張緩和の進展のため、恒久平和のため、諸国民間の信頼と相互理解の強化のための諸闘争を今後とも一貫して頑強につづけてゆくかたい決意をもっています。ソビエトの人々は10月社会主義大革命62周年を新しい労働の高揚をもって祝ったばかりです。私たちのすべての思考は今、国民経済発展の第10次5か年計画の成功裏の遂行に向けられています。

第10次5か年計画でのソビエト経済は本当に大規模な経済です。1978年のソ連邦の国民経済は1兆2,020億キロワット時の電力、1億5,100万トンの鋼鉄の生産、5億7,200万トンの石油、3,720億立方メートルの天然ガス、7億2,400万トンの石炭の採掘を達成しました。第10次5か年計画の4年目が終了しようとしている現在すでに確信をもって言えることは、ソ連共産党第25回大会で予定された社会・経済的主要課題は達成できるということです。

ソ連邦の工業、農業、運輸の発展水準で重要な地位を占めているのはロシア共和国です。とくに一連の新しい地域生産総合体が形成されているシベリアと極東の経済の発展は高いテンポで続いています。わが祖国の東方の広大な地域における最も豊富な天然資源開発の中核となり、ま

た太平洋沿岸に通ずる鉄道の重要な動脈であるバイカル・アムール幹線鉄道の建設は成功裏のうちに進んでいます。

わが国の農業生産は一層の発展をみています。それを生産性の高い生産部門へと変化させる大きな対策がとうに実現されています。第10次5か年計画期間中に農業労働の電化が3分の1増大しました。土地の化学化と改良が大きな規模で行われています。

経済発展に第一義的な意義を与えているわが党は、社会主義的民主主義の完成、国民経済の計画と指導の効果性の向上に関連する一連の原則的対策を一貫して実現しています。生産と労働の質の向上と全部門にわたる経済の調和のとれた総合的発展を保障するための大きな活動がなされています。

わが国では社会・経済的な大きな課題が解決されています。国民の物質的また文化的生活水準がたえず高まり、賃金と国民所得は不断に増大しています。国民教育と保健は間断なく発展し、ソビエト人の労働と休養条件が改善されています。現在ソ連邦は、医師による住民の保障については世界で第一位を占めています。わが国においては1928年から家賃は変らず､それは労働者の家族の収入の平均3%を越えていません。

わが国ではすべての人が住居を有しているのはもちろんのことです。それにもかかわらず、各家族が近代的な設備のととのった住居を無料で受けとれるように積極的に新しい家屋を建設しています。ソビエトでは毎年1億平方メートル以上の住宅を建てています。1か月足らずで私たちは50万の人口をもつ都市を創設するに十分な住宅を建てているのです。住宅運営のため国家は毎年50億ルーブル以上の資金を割いています。

本年の 1979 年は周知のとおり国際児童年と宣言されています。子供は人類の 3 分の 1 以上を占めており、子供は私たちの将来です。自分たちの父親の事業は彼らが受けつぐのです。彼らは必ず地上の生活をよりよく、またより幸福なものにするでしょう。そして私たちの義務は、すべての民族の子供たちが何一つ不自由なく、平安と喜びのうちに育つよう努力することです。

ソビエト政府は児童に対し大きな配慮をしています。社会・経済的、医学的対策の広範な計画が実現されています。児童の健康保護と養育の問題は人民代議員ソビエトの総会で定期的に審議されています。

尊敬する知事のみなさん、みなさんの所でも子供に対し大きな配慮をしていることを私たちは知っています。子供たちを愛し、その産声を聞いてよろこびます。

私たちの子供が戦争の惨禍、その損害による悲しみと絶望を絶対に知らないようにするため、あらゆる可能なことを私たちはなすべきです。彼らの明るい夢と計画、彼らのすべての期待が実現しますように。

ソビエト人の基本的な教育は、すべての国民に対する深い尊敬と戦争と暴行に対する鋭い耐えがたさとを幼年時代から人々に植えつけるソビエト国家の平和愛好的な外交政策です。それは、現代の核の時代に、すなわち、平和のための闘いの中で諸民族の新しい、より深い連帯感が現われ、またそれとともに世界の運命に対するより鋭い共同の責任感が現われる現代の核の時代にとりわけ必要なものなのです。この感情こそ、平和の強化のため、確固とした国際安全のためのもりあがる闘いへの力強い刺激なのです。

世界情勢の今日の動き、これは多くの面で大衆勢力の活動の賜物であ

り、いまだかってみたことのない国民大衆の積極性の成果であると確信をもっていえます。軍備の一層の拡張に断固として「ノー」といえるだけの可能性をすでに人類がもっていることを人々は知っています。私たちは、本会議の参加者は国民大衆のこのような決意に完全に同感であると確信しています。この 10 年間だけで世界における核兵器の貯蔵量は 3 倍に増えましたが、これは全人類を 15 回も潰滅させるのに十分な量なのです。

ソビエトの市民は、軍拡に反対し、政治的緩和に加えて戦争の緩和のため倦むことなく頑強に闘っている自己の政府を熱烈に支持しています。私たちはソビエトのイニシアチブのおかげで、そのねばり強さのおかげで、この分野における約 30 の条約と協定が結ばれたことを誇りとしています。

重要な国際問題の解決へのわが国の世論の参加について今まで語ってきました。これからわれわれ両国と両国民に直接関係のある問題にふれてみたいと思います。

ソビエトは歴史的にも経済的、地理的にもアジア大陸と密接な関係にあったし、また今もあります。そして地球上のこの地域の平和の強化を真剣に考えているのも当然のことでしょう。私たちは、世界発展の支配的傾向となった緊張緩和が人類の半分以上の住むアジア大陸を避けて通れないと考えています。

ソビエトと日本は隣国です。自然がかくのごとく処理したのです。ですからこそ両国間の関係を定めるのに重要なのは善隣と互恵の協力だったのです。これはソビエトの国民にとっても、日本国民にとっても、同じ程度に利益にかなった唯一の正しい道であると私たちは深く確信して

います。

近年、ソビエト側から日本との政治的接触正常化を可能にする積極的な方策がとられ、貿易・経済関係ならびに文化、科学・技術分野における交流が本質的に拡大されました。

ソ連共産党中央委員会書記長、ソ連邦最高会議幹部会議長 L. N. ブレジネフと日本の首相との親書の交換が行われました。相互訪問と社会的代表団の交流が行われています。ソ連邦最高会議と日本の国会の両議院議長の相互訪問、外務委員会代表団の交流が実現しました。原則として国会代表団には、両国の状況の相互紹介、政府指導者の引見と懇談のためのすべての条件が作られます。

ソ日関係の中で最も発展している分野は、貿易・経済関係です。この問題に関しては、駐日ソビエト通商代表部の V. B. スパンダリアンが報告を行います。

私たちの考えではやはり重要である次の文化関係に移りたいと思います。両国間のこの関係は、はば広い展開をみています。周知のように私たちの有名な劇場チームと一定の芸能人はとても忙しいものです。無限ともいえるわが地球の隅々で彼らの公演を待っています。それにもかかわらず、日本との善隣関係の発展に大きな意義をみとめるソ連邦とロシア共和国の両文化省は、日本の芸術愛好家の広い層の欲求を満足させるために大変に困難な時間のくりあわせをして日本行きを実現させています。一方ソビエトの観客は大きな満足をもって日本からの音楽その他の芸能界の人々を暖かく迎えています。日本におけるソビエトの映画祭およびソビエトにおける日本映画祭は伝統的なものになりました。

科学関係もかなり成功裏に発展しています。ロモノソフ名称モスクワ

国立総合大学を含むソビエトの多くの高等教育機関は日本の諸大学と関係を保っています。ソ連邦科学アカデミーと日本の学術機関との接触が確立しました。

地方権力機関、社会団体、労働組合、婦人、青年その他の団体による交流関係は重要な意義をもっています。

現在ロシア共和国の 15 の都市は日本の 16 の都市と友好関係を結んでいます。相互に関心のある問題を討議するシベリアと極東の市ソビエト執行委員会議長と日本の西部沿岸都市の市長との会議（ソ日沿岸市長会議）は定期的に開催されています。第 7 回定例会議は先月、ウランウデ市（ソ連邦）で開かれました。ソビエトと日本の都市代表は両国と両国民関係の発展強化に関する現実的な問題について討議しました。

最近、ソビエトと日本の都市間の各種代表団、スポーツマン、アマチュア芸能団の相互交流ならびに展示会、ブックフェア、レコード展の相互交換の数が目にみえて増えてきました。

両国間のツーリストの交流が不断に発展していることを満足の意をもって指摘します。この事業で大きな役割を果しているのは、モスクワ州とレニングラード州の人民代議員ソビエトと極東、シベリアの地方と州のソビエトです。

日本でもツーリスト・グループのソ連邦旅行に大きな意義が与えられていることを私たちは知っています。とくに秋田、福井、鳥取その他の県の知事がみずから訪ソ青年ツーリスト・グループ「友好のキャラバン」を結成し、時としてその団長として訪ソされています。日本からのツーリストの皆さんには、関心のある文化、教育、保健の施設や産業企業の視察のためのすべての可能性が与えられます。日本のツーリストとソビ

エトの人々との会合と懇談の場が設けられます。そしてこのことが広く実行されればされるほど両国民はお互いにそれだけよく知り合い、それだけ容易に真の善隣関係がうち立てられるのです。

ソビエトと日本の両国民間の相互理解の深化の点で大きな実り多い活動をしているのは諸友好協会であることを特に強調したいと思います。

ソ連邦地方（州）執行委議長と日本都道府県知事との会議（ソ日知事会議）もまたソビエトにおいて重要な意義をもっています。私たちとみなさんの課題は全般的平和と国際安全のためのソビエトと日本との関係強化の事業における地方権力機関と市民の各層の役割をより一層高めることにあります。議事日程におけるこの問題の討議のさいに、この分野におけるソビエトの自治共和国、地方、州の市民がどのような活動をしているかについてより詳細にわたって他のソビエト側の代表団員が発言することになっています。

共同事業の遂行における両国世論の各層の参加のこれまでの経験は、ソ日関係の一層の発展強化の事業でそれが著しく大きな役割を果したことを証拠だてています。

日本との全面的な関係の発展と友好の強化への私たちの意向は、状勢に左右されるのではなく、不変なものです。この重要な問題におけるソビエトの路線は、ソ連共産党中央委員会書記長、ソ連最高会議幹部会議長 L. I。ブレジネフ同志によってはっきりと次のように述べられています。「私たちは善隣協力と互恵を基盤として日本との関係を誠実につくり上げたいと考えている。ソビエトは日本に対してこれ以外のことは考えなかったし、今も考えていない。」くり返しますが、日本に対する私たちの路線は根本的なものです。私たちはあなたがたの国との友情の関係、

真の善隣関係を望んでいるのです。

私たちの方針の現実の確証は、両国関係のうち、条約の機の熟した分野を条約として基礎づけるため、それらの分野を網羅した善隣と協力に関する条約のソビエト案を日本政府の検討を受けるべく、かつて提案した事実です。

ソビエトの世論はわが政府のこの新しいイニシアチブを熱烈に支持しています。私たちは、善隣と全面的互恵協力の道におけるソ日関係の発展を宣言し確保するであろうソ連邦と日本との条約の締結はソビエトと日本の両国民の利益にかなうものとなるであろうことを確信します。この行為は平和と国際安全の確立への大きな前進となることでしょう。

両国家関係において、ソ日両国民間の信頼をたえず強化し、協力と善隣の基盤を拡大し、ソ連邦と日本との関係に緊張をあおり不信感をたきつけようと企てている勢力の行動を断固たちきるため、双方の最大の努力をかたむける必要があると私たちは考えます。このことに関する必要性ははっきり言って大きなものがあります。

尊敬する知事のみなさん！　私たち両国間の関係の強化と発展のため、全般的平和と国際安全のため、私たちとともに共同して本質的な貢献をされるよう、みなさんがたの側からできることすべてをなされることを期待してやみません。

ご清聴ありがとうございました。

② 平林鳥取県知事

日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について（主報告）

日本とソ連邦の間の文化、スポーツ等における交流は、近年、その幅と密度を急激に増加しつつあります。これは両国の友好と親善にとってまことに喜ばしいことだと存じます。

まず、両国の人的交流の状況でありますが、1978年に訪ソした日本人の数は16,492人でありました。これは16年前の1962年における1,516人と比べて実に10倍を超える人数になっております。

また、民間航空定期便は12年前に東京～モスクワ間で1週間往復1便をもって開始されたのでありますが、現在は、東京～モスクワ間と新潟～ハバロフスク間とを合わせて、毎週25往復と、これも大幅に増加しております。

公共放送であるNHKは、ロシア語講座を、テレビでは週4回、またラジオでは週12回放送いたしておりますが、最近NHKが調査したところによりますと、テレビのロシア語講座は、全国で100万人もの視聴者があることがわかりました。

次に、スポーツの面についてみますと、モスクワオリンピックも、いよいよ来年に迫り、今年夏には、プレオリンピックがモスクワで開催されましたが、わが国は、バレーボールをはじめとして9種目に106人の選手が参加しました。この様子はわが国でも毎夜テレビで放送されたところであります。

また、定期的に行われるバレーボールの日ソ対抗試合をはじめとして、人気の高い体操など、多くの種目で日ソ間の競技が行われ、両国の友好

親善関係について、大きな役割を果たしているところであります。

文化面についてみますと、まず音楽では、ピアノのリヒテルをはじめ多くの演奏家達が来日され、また絵画では、ソ連美術家同盟第1書記サラコフ氏の個展や貴国の美術館の所蔵する作品の展覧会が開催されるなど、活発な交流が続けられております。

また、貴国のオペラやバレエの日本公演は最近では恒例化しており、夏には毎年ボリショイ、レニングラード、キエフの三大バレエ団が交互に来日し、約1か月間日本の各地を公演して回ります。このほか、日ソ両国間で多くの交流があり、しかもますます頻繁となっておりますことは、両国の理解と友好にとって喜ばしいことであります。

こうした交流の増大に伴い、両国の地方自治体間における文化友好関係も最近目ざましいものがあります。

北海道では、定期的に、「北海道・ソ連極東親善スポーツ大会」を実施しており、本年8月に第5回夏季大会が札幌と旭川で行われ、ソ連から47名の選手が参加されました。

また、福井県知事の提唱により、1971年から「訪ソ青年の船」、1976年から「訪ソ婦人の船」という行事が毎年行われております。今年は両方の行事に14県、352人の青年、婦人が参加し、敦賀港から出航して、ソ連の各地を訪問いたしました。

秋田県でも、1972年から「秋田県青年海外研修団」を組織して毎年ソ連へ派遣しております。本年は第8回で、7月に、秋田県知事が団長となって196名の勤労青年が秋田港から出発し、約2週間ソ連内各地を訪問いたしました。

近年、このように各県の後援により行われるようになった地方の青年

や婦人の親善訪問は、それらの人々が貴国の青年や婦人たちと交歓、研鑽を重ねるとともに、各種の施設の見学を行い、大きな成果を収めており、注目すべき事業であると存じます。

このほか、兵庫県とハバロフスク地方、石川県とイルクーツク州などは、さまざまの形の交流を通じて親密な友好関係を積み重ねておられます。

次に、日ソ両国民の親善に大きく寄与しているものとして、姉妹都市について申し述べたいと存じます。

日ソ間における姉妹都市関係の端緒を開きましたのは 1961 年 6 月舞鶴とナホトカでした。その後、両国の都市の間でつぎつぎと縁組が行われ、現在では日本の 18 の都市がソ連のそれぞれの相手都市との間に姉妹関係を結んでおり、それらの都市間ではさまざまの親善友好事業が行われております。

1970 年に「日ソ沿岸市長会議」が設けられ、新潟など日本の 18 都市とソ連邦のハバロフスク市など 10 都市が参加して定期的に日ソ両国で交互に会議を開いております。本年は 10 月にソ連ブリヤート自治共和国の首都ウランウデで第 7 回会議が開催されております。

さて、日ソ知事会議は、今回で第 9 回と相なります。貿易経済問題とならんで、毎回日ソ両国の文化友好関係の発展について討議を重ねてまいりました。また、会議前後における各地方の視察旅行において、知事の代表団が各界の指導者や市民のみなさんと親しく接触して両国間の友好、相互理解の増進に貢献してまいりました。なお中央にある各種報道機関はもちろん、各地方の新聞、テレビも、日ソの州、県の首長たちが両国の友好親善の一層の発展のためにしているこうした努力に注目を寄せ、

その相互交流の状況等について報道し、広く一般住民に伝えているところであります。

われわれは、日本の都道府県、市とソ連の地方、州、市との間で首長を先頭として貿易、経済、教育、文化、科学技術、スポーツなどさまざまの面で、あらゆる階層、職業、年齢の人々による交流が今後着実に発展し、それらを通じて両国民の間の相互理解と親善関係が堅固な基礎の上にうちたてられ、両国民の長期的利益の伸長と世界の恒久平和が実現されることを心から念願して私の報告を終らせていただきます。

③　ポドガエフ・ハバロフスク地方執行委員会議長

尊敬する議長！

尊敬するみなさん！

同志のみなさん！

ソビエトの地方（州）執行委議長と日本の都道府県知事との第9回会議に参加できたことを大きな満足とするところでございます。これまでの会議に何回も参加した1人として、私はこの会議が特別な責任を私たちに負わせているという同僚の発言を支持します。私たちと県知事のみなさんは、隣国である両国の地方権力機関を代表しています。われわれ隣国は、自国の人民の福利のため、また全般的な平和のため、友好関係と互恵協力を必要とします。私たちこの会議に参加しているソビエト代表団は、ソビエト国民とともに、ソビエトとすべての諸国民（まず第一に隣国）との友好関係の発展を最大限に促進するため、可能なあらゆることを行っています。国家間の平和共存に対する賢明な代案がない以上、隣国同士は平和と協力のうちに生活することを学ばねばならないといっ

たら本会議参加者全員の見解を表明していると思います。

しかしながら私たちの関係発展の事業には一定の困難と障害があります。それは、社会主義に対し侵略的な志向をもち、「冷戦」時代をなつかしがる勢力の明確な目的をもつ活動によってひきおこされています。これらの勢力こそが、色々と案出する口実によって反ソ運動を系統的に組織し、紛糾を挑発し、私たちへの内政干渉を企て、軍備競争をかきたてようとしているのです。

これらの勢力の行動がわれわれ両国関係の順調な発展を妨げています。私たちは、双方に良識が存在すれば両国関係のいかなる問題も解決できると確信しています。これらの勢力に対しては、おちついて、かつ思慮深い態度で接するとともに、パートナーに対してはこれを理解するよう努め、激情をあおることを避けなければなりません。

このことの確固とした証拠となるのは、戦略攻撃兵器制限条約のソ米の調印でありましょう。他にも例があります。ソビエトのイニシアチブにより、双方に良識がある場合、軍拡競争制限問題に関する約 30 の条約と協定が締結されました。この際、もちろん、大きな困難を克服しなければなりませんでしたし、また、軍拡競争抑制の反対者による頑強な抵抗に出あいました。

そしてこれらの困難にもかかわらず、反動、侵略、軍国主義勢力の抵抗にもかかわらず、ソビエトは軍備拡張の非道徳的な環をたちきるため、恐怖の均衡を利益と信頼の均衡に変えるため前進し続けるでしょう。わが国は、他の平和愛好勢力とともに、人間各個人の最も神聖な権利である生存の権利を擁護するため、ねばり強くかつ明確な目的意識をもってこの焦眉の現代的問題解決に努力しているのです。

そしてこのような条件のもとでも、死の兵器の蓄積に興味をもち、巨額な利益のみを心配し、「ソビエトの軍事的脅威」についての挑発的な作り話を流布する人々がいるのです。

一連の国ぐにのマスコミ機関ならびに一定の国家活動家は、大衆の間に毎日のように恐怖の種をまいています。この騒ぎのもとで軍備競争が激化し、また、あらゆる種類の兵力数十万が参加して大量の各種兵器がテストされる大規模な軍事的訓練、演習が行われています。それだけではありません。南から北へ、西から東へとソビエトとその同盟国の国境に沿って遠距離用核およびその他の兵器で装備された爆撃機や潜水艦を有する何百もの軍事基地が不気味な鎖状をなしてのびています。現在、翼つきロケットと弾道ロケット「ペルシソグⅡ」約 600 をヨーロッパに新たに配置展開する計画があります。ヨーロッパはその例外ではありません。日本におけるアメリカの軍事兵力の増強が西側の新聞で報道されています。NATO では中国への近代的兵器供給の可能性が検討され、隣国に対して向けられている北京の軍事的準備が奨励されています。

それにもかかわらずソビエトは平和愛好国家です。私たちはどんな課題でも戦争を通じて解決しようとする意向は全くありません。ソビエトの平和愛好精神は、人々の物質的福祉と文化の不断の向上に対する配慮ということが社会の最高目的として法律や最高政治機関の決定において宣言されている、そういう私たちの社会そのものの本質に由来するものであります。

ソビエト国民は、全力をあげて、またすべてのエネルギーをかたむけて、ソ連共産党第 25 回大会で策定された社会・経済的綱領を実現するための労働にいそしんでいます。第 10 次 5 か年計画の期間中に大きな社会

的諸施策が実現し、生産力が増強し、わが祖国の経済的威力が成長し、物質的にも精神的にもソビエトの人びとの生活が豊かになりました。

すべてのソビエト人とともにハバロフスク地方の住民も労働にいそしんでいます。第10次5か年計画の3年間にわが地方の工業生産高は18.2%増大し、労働生産性は13.9ののびをみせました。当地方の国民経済発展のための国家投資は、第9次5か年計画の相応期間と対比して37%も多くなっています。一連の工業と農業企業、また運輸と通信の施設が建設されました。

ハバロフスク地方にとって大きな出来事であったのはバイカル・アムール幹線鉄道の極東小環状線の開通です。バイカル・アムール幹線鉄道の開通は木材、木材加工、採炭、化学工業、鉄および非鉄金属工業の一層の発展を促します。前述の諸部門の発展は、わが地方と日本を含む太平洋地域諸国との対外経済関係の一層の発展を促進します。

第10次5か年計画期間中にハバロフスク地方の農業に従事する勤労者は大きな成功をおさめました。すべてのカテゴリーの経営体の製品の年平均生産高は第9次5か年計画の対応期間と対比して1.5倍に増大しました。

私たちの地方における勤労者の福祉の向上にむけられた党と政府の政策は成功裏に実現されています。諸対策を講じた結果この5か年だけで住民の実質収入は28.3%増大しました。第10次5か年計画の3年間に国民消費物資の生産は15.6%、文化・生活用品と家庭用品は20%増えました。学校が1万6,152か所に、幼稚園と託児所が1万1,235か所に建てられましたし、210万平方メートルの住宅が建設されました。勤労者の健康を配慮して、第10次5か年計画のこれまでの期間中

にハバロフスク市に1,000ベッドの地方総合病院、120ベッドの眼科病棟、600人用の総合診療所および当地方の他の都市に4つの大きな病院が建てられました。

ハバロフスク地方人民代議員ソビエトは、対外関係発展についても大きな活動をしています。ハバロフスク地方と日本の府県・都市との間でますます盛んになっている文化交流を例にとることができます。ハバロフスクの演奏団「労働予備軍」が日本に行き、ハバロフスク市では新潟からの児童バレー団が成功裏に公演を終りました。今年の夏には札幌おいてソビエト極東対北海道の定例のスポーツ競技会があり、1980年のはじめには北海道のスポーツマンがハバロフスクへお客として訪れます。

地方自治体職員、青年、医師、教師、都市運営専門家、婦人、アマチュア芸能団などの代表団の交流が続けられています。

代表団の交流の経験を活用しながら、私たちはソ連共産党中央委員会書記長、ソ連最高会議幹部会議長L. I. ブレジネフ同志の述べた言葉「……われわれ両国民間の、そしてわれわれ両国家間の、確固とした、伝統的な友好関係を樹立するために、真に長期的歴史的期間にわたるソビエトと日本との善隣関係の基盤をつくる」という課題解決のために力を傾けています。

私たちは、当地方を訪れた代表団員がソビエト人の生活と慣習、彼らの文化、そしてさまざまな分野における成果をつぶさに視察できるよう全力をつくしています。

わが地方でいつも行われている日本の代表団員たちとソビエトの同職者たちとの会合は相互に利益をもたらしています。私たちは、当地方を

訪れる日本からのお客さんたちの滞在が実り多く、楽しいものになるよう努力しています。

彼らはハバロフスク市の市内見学を行い、学校、企業、児童用施設、医療施設などを視察し、市の新建設地やスポーツ施設を参観し，演劇やサーカスを観賞し、公園、博物館を訪れます。

ハバロフスクの住民が日本からのお客さんにいつでも示す暖かい歓迎は、わが地方を訪れる日本の市民の数が不断に増えることを促しています。

秋田県と福井県からの青年代表団のわが地方訪問は事実上伝統的な行事となり、今年、ハバロフスク地方を 130 名からなる兵庫県からの代表がはじめて訪れました。

わがハバロフスクの地におけるこれらすべてのソ日青年の会合は、つねに友好と相互理解の証明となっていることは、今日、私にとって大きな喜びであります。

会合と懇談、個人的接触、アマチュア芸能団の共同出演、スポーツ競技、友好の夕べなど、すべては若人をより近づけ、お互いをよりよく理解する助けとなっています。

両国の民間団体間の友好関係発展の過程において、ソビエトの都市と日本の都市との姉妹関係という重要な形態が生まれ、広い発展をみています。

15 年前にハバロフスクと新潟が姉妹都市となりました。今年私たちは、尊敬する坂井知事を団長とする兵庫県代表団の団員の方がたとともに、わが地方と兵庫県との友好関係樹立 10 周年を盛大に祝いました。代表団の訪問の成果として共同声明が調印されました。

ハバロフスク市においては、毎年、姉妹都市デーがソ日両国民の友好の祭日として盛大に祝われます。この日の特徴として学校、ピオニールの家や宮殿で「地球上の平和と友好のために！」の名のもとに児童絵画コンクールが行われ、若い国際主義者の記者会見、日本へ行って来た人たちや丁度その時にハバロフスクに滞在している日本からのツーリストのみなさんと生徒たちとの会合などがもたれます。

この日にちなんだすべての行事は、あとで地元の新聞雑誌、ラジオ、テレビで広く報道されます。

私たち両国の善隣関係の発展における事業で顕著な貢献をしているのはソビエトと日本の民間団体です。ソ連邦と日本の労働組合の間の交流は年とともに強化され拡大しており、ソ日労働組合は定期的に行われています。ソビエトと日本の両国民の平和と友好のためのソ日民間団体の第１回から第３回までの集会はハバロフスク市で開催され、その後、この集会はソ連邦と日本の大きな都市で交互に開かれるようになりました。

日本の住民にソビエト諸民族の生活を紹介するはば広い活動を行っているのは、ソ連対文連（対外友好文化交流団体連合会）の枠内で活動しているソ日協会です。

この重要でまた必要な活動には、ソ連対文連ハバロフスク支部、ソ日協会ハバロフスク支部、当地方の労働組合と青年組織、地方ソビエト婦人委員会、平和擁護委員会その他が積極的に参加しています。

すでに述べたことから分るように、ソ日文化協力は成功裏に発展しており、そしてこのことが両国民間の友好と相互理解の感情を深めるうえで良好な影響を与えるのは勿論のことです。

私たちはまた、両国の関係を一層発展させる計画の中で、科学技術情

報（とくに工業部門のそれ）の相互交換に重要な位置を与えています。

すでに本会議において指摘されたように、ハバロフスクにおいて最近第14回国際太平洋科学者会議が開かれました。この会議には日本の学者を含む50か国の代表が参加しました。ハバロフスク市人民代議員ソビエトは、市の学術団体とともにこの会議の組織と遂行のため大きな仕事をしました。会議参加者は、太平洋の豊富な資源の最良の開発に関する一層の協力に向けられた有意義な決定を採択しました。私たちの考えでは、このようなフォーラムの開催は、栄養不良と飢餓、燃料と資源の不足といった緊要な世界的問題解決に関心を持つあらゆる国ぐにの学者の協力発展に多くの点で寄与することと思います。もちろん、このような協力は恒久平和の条件においてのみ可能です。

私たちは、本会議もまた両国家と両国民間の経済と文化関係の一層の拡大の事業において新しい貢献をすることを心から期待してやみません。ご清聴ありがとうございました。

④　君　新潟県知事

日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について

親愛なるソビエト社会主義共和国連邦の友人各位の来日を心から歓迎いたします。

私は、新潟県知事の君健男でございます。貴重な時間をいただき「日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について」意見発表の機会を与えられたことを深く感謝申し上げます。

ご承知のように、貴国とわが国との文化交流は、舞台芸術、文学、美

術等を通して古くから行われてきました。

また、今後とも日ソ両国民が、文化を通して相互に理解を深め、交流を進めることは、きわめて重要な課題であると思います。

近年、両国国民の相互訪問が年々増加し、芸術文化の面でも交流が行われるようになりましたことは誠に喜ばしいことであります。

特に貴国の音楽やバレエは、年間3・4回日本での公演が行われ、レニングラード・フィルや、ボリショイバレエ等のメンバーはなじみ深いものとなっております。

美術面にしても、昨年はトレチャコフ美術館の名作展等を通して貴国の伝統美術と現代美術の粋にも親しく接しております。

文学においては、新潟県出身の原久一郎氏による「戦争と平和」等のトルストイの全作品の先駆的な翻訳紹介はもちろんのこと、ゴーリキーの「どん底」等々の作品の与えた影響は、わが国の文学界や演劇界に現在でも息づいております。

貴国の伝統ある文化は、古くからわが国の芸術文化の基礎となっており、したがって今でもわが国のアーチストや研究者が貴国を訪問し、意欲的に貴国の文化を研究しております。

しかし残念ながらわが国の舞台芸術等が貴国で上演される例は極めて少られております。

わが国にも、歌舞伎、能、あるいは文楽といった伝統芸術がありますが、これらは世界に誇るべき芸術であると自負しております。

歌舞伎等については、貴国での上演も試みられたことがありますが、更に門戸を開いていただきたいものと願っています。

ハバロフスク市と姉妹都市を結んでいる新潟市は、毎年親善視察団の交

流を行ったり、ハバロフスク市の学校と姉妹校を結んでいる新潟市内の小・中学校は、児童画の交換等を通して文化的な交流を行っております。

また、アマチュア芸術文化団体である新潟バレエスクールは、近年2回にわたりハバロフスクで公演を行い、親善の役目を果たしており、さらには新潟県の青年たちも「青年の船」でハバロフスクを訪問し、青年同士の交流を深めたのもつい近年のことであります。

そのほか語学を通して貴国を理解しようということで、各地においてロシア語の講座が開かれ、熱心な学習が行われております。わが国の一小都市、一アマチュアバレエ団、あるいは青年たちが日ソ文化交流を地道に実践し、成果を挙げ、日ソ友好の底辺を拡大しようと努力しております。

一方、貴国の若い学者たちが、日本の美術品の研究を行ったり、良寛研究や川端康成等の研究まで幅広く研究成果を挙げていることも承知しております。

このような研究を通しての文化交流や、芸術を通しての交流も、単に日ソ両国の文化交流のみならず、ひいては世界平和へのかけはしとしても意義あることと考えます。

わが国の国民は、現在、民族的遺産を大切にしながら現代感覚を身につけ、創造性豊かな文化を築きあげようと努力いたしており、最近では、行政の分野におきましても文化性を指向しながら文化国家の建設を目指しております。

各位には、日本各地の現状をつぶさにご視察いただきながら、わが国の文化と、日本国民がかける日ソ文化交流拡大に対する熱意をくみとっていただきたいことをお願いして意見発表といたします。

⑤　サガノフ・ブリヤート自治共和国閣僚会議議長（首相）

尊敬する議長！

尊敬するみなさん、同志のみなさん！

私たちが日本の全国知事会の代表団をモスクワにお迎えしてから2年以上の年月がすぎ去りました。この期間中に、世界においても、またわが国民の生活においても、重要な出来事がありました。

ソ連邦の地方および州ソビエト人民代議員執行委員会議長と日本都道府県知事との第9回のこの会議は、すでにご指摘のあったように、軍拡競争の中止、核その他の大量殺りく兵器の禁止、極東地域における国際緊張緩和の拡大のために広範な人民が積極的な闘争を行っている時期に開催されています。そしてこの事業においても一定の成功が達成されました。貿易・経済協力の発展、諸国民間の相互理解と信頼の増大の点でも積極的な進歩が見られます。

この偉大なまた気高い事業において、ねばり強い、一貫した闘士として闘っているのはわが国民とソビエト政府です。

国際平和と諸国民の安全保障に向けられたソビエトの多くのイニシヤチブはソ連邦の外交政策の平和愛好方針の輝かしい証拠であり、すべての国民と平和と友好のうちに生活しようとする熱烈な希求の証拠であります。

平和の確立と、すべての国家、国民の間の友好関係の発展は、現代における最も焦眉の問題の一つです。

この問題の解決において重要なのは、あらゆる国の政府と国民の相互的な努力だけではなく、地方自治体と広範な世論のそれです。

ソ連邦の地方および州ソビエト執行委員会議長と日本の都道府県知事

との定期的な会議、相互の意見の交換、ソビエトの自治共和国、地方、州と日本の都道府県との貿易、経済および文化の発展に関する実際的施策の討議は、この気高い事業において自己の積極的な貢献をする使命をおび、ソビエトと日本の両国民の相互理解の深まり、友好の強化を促進します。

私は、兄弟的な多民族共同体であるロシア共和国に加盟するブリヤート・ソビエト社会主義自治共和国を代表しています。ソビエト政権の時代に私たちのところでは近代的な工業生産が創設され、大きな工場、企業、発電所、コンビナートが建設されました。

現在、ブリヤートでは、精密機器と自動化手段、河川船舶と電気モーター、パルプとボール紙、毛糸と木材資材、畜産のための機械と家庭電気製品その他を生産しています。

共和国の経済発展の過程は、危機や不況に見舞われることなく一貫して高揚しています。近年、石炭、鉄鉱石、鉛、亜鉛、希金属、アスベスト、石英岩その他の有用鉱物の新しい産地が開発されました。バイカル・アムール幹線鉄道の建設とともにこれらの開発はより集中的となります。

文化、科学、芸術の分野に関しては、ここではほんとうに暗闇から光明への飛躍がみられました。約半世紀以前にはブリヤートのほとんどの住民は文盲でした。3万人の住民に対して1人の医師しかいませんでした。現在では、100万に少しかける人口をもつ自治共和国には、27の高等および中等専門教育機関、600を越える義務教育学校、4つの劇場、1,200のクラブと図書館があり、自己の学術センターである科学アカデミー支部が設立されています。

共和国の都市、農村、村落には74の児童音楽学校が開校しており、49のアマチュア民族劇団が創設され、各種のアマチュア芸能サークルには1万人を越える音楽、歌、舞踊の愛好者が参加しています。ほとんどすべての農村と村落には、国の経費負担により、いかなる医療手当も無料で受けられる医療機関があります。

大衆の中から少なからぬ優秀な芸能人、画家、作曲家、作家、学者がでました。才能ある私たちの舞台芸術家たちはヨーロッパ、アジア、アフリカの多くの国ぐにで成功裏に公演をしています。

人口があまり多くないソビエト・ブリヤートが収めた達成はすべてのソビエト人の共同の努力ならびにその兄弟的協力と相互援助の成果であり、共産党のレーニン主義的民族政策の実行の成果であり、特に強調しておきたいのは、平和な生活と平和な労働（これなしにはそれらの成功も不可能であったでしょう）の成果であります。

ソ連邦内における諸民族間の友好は私たちの貴重な財産であり、私たちの制度をかちとったソビエト人民の各人にとって最も重要で最も大切なものの一つです。

それと同時に私たちは国際主義者でもあります。私たちはすべての国家と国民の友好と互恵の協力を主張しています。友好の精神によって指導される私たちの共和国は、最も近い隣国であるモンゴール人民共和国と真の兄弟的関係を確立しました。私たちの間では国家関係でも社会団体関係でも広範な関係が保たれており、代表団、各種の情報が積極的に交換され、それぞれが経済と文化建設における経験を交換しあう実務的会合がもたれます。モンゴール人民共和国市民と同様、私たちも、厚顔にもモンゴールの領土を要求する中国指導部の非友好的、というより正確

にいえば侵略的態度、を憂慮しています。中国の軍隊がベトナム社会主義共和国の領土に侵入した際彼らの冒険がいかに終ったかはよく知られるところです。しかし彼らはそれでおさまることなく、隣国との国境状態を限界まであおりたて、軍備拡張を公に呼びかけ、第3次世界大戦の不可避性について語っています。中国の指導部は、自国だけでなく一定の隣国の国民に「北からの脅威」が迫っているかのように思い込ませようとしています。このような主張が全くばかげていることは明々白々です。いかなる「北からの脅威」もかつてなかったし、いまもありません。これらすべては瞞され易い人びとを対象とした真赤な虚偽です。

一定の国ぐににおいて、いな日本においてさえも、戦争心理を挑発することが文字通り自分たちの利益となる人びとがいるということは驚くほかありません。このことは一層の軍拡競争をよびおこし、それに対応して、何らかの形で殺人の道具の生産に関係している人びとの利潤の増大をもたらします。よく発達した経済と昔からの独特の文化をもつ近い隣国同士であるソビエトと日本には、貿易・経済、科学・技術協力の発展、文化財の交換、両国民間の福祉のため、平和と国際安全のための相互信頼と善隣関係の強化といった、はるかに高い、はるかに有益な目的があるのではないでしょうか。ソビエトの地方・州と日本の都道府県の世論、両国の地方自治体は、この事業において重要な役割を果すことができます。

私の見解では、文化協力拡大のすべての可能性が汲みつくされたとは思いませんが、私の仲間であるソビエトの州・地方執行委員会議長ならびに尊敬する日本の知事の皆さんがすでに述べられたように、この分野において、双方の共同の努力のおかげで少なからぬ進歩が達成されてい

ると確信をもって言うことができます。ブリヤートを例にとりますと、日本映画祭、日本の児童絵画展、姉妹都市の生活、その経済と文化の発展についての講演、これらの都市の代表の会合は大変人気があります。

今年の10月7日から9日までウラン･ウデ市で開催された日本の西海岸諸都市の市長と東シベリア・極東の市ソビエト人民代議員執行委員会議長との定例会議（ソ日沿岸市長会議）には大きな関心が寄せられました。会議の参加者は、ソ日両国民の利益のための平和擁護闘争と善隣関係、経済・文化協力における都市の積極的参加に関する問題ならびに国際児童年にちなんだ諸問題に関して意見の交換を行いました。

日本の市長のみなさんは市内のいろいろな教育･文化施設を視察され、幼い市民の生活を見学されました。

自治共和国の多くの市民は観光客として日本を訪れ、ウランウデ市のいくつかのグループは姉妹都市留萌市を訪問しました。一方、留萌からは一度ならず地方自治体の代表団が来られました。

このような会合や旅行が大変有益であるのは勿論のことです。

自然環境の研究とそれに対する好ましからざる影響からの保護といった重要な分野における交流を拡大することが望ましいと思います。それは、例えば、産業廃棄物、有害化学品、公共施設や家庭の廃水あるいは水源、表土、大気等への有害な投棄物からの汚染防止問題解決に関する経験と科学・技術の成果の交換を意味します。

産業の急速な発展、新しい天然原料資源の経済的流通過程への導入などによって、シベリアと極東の地域でも、またおそらく日本の多くの府県でも、この問題が第一義的なものになりました。ですから両国の自治体当局の共同の努力はこの問題の解決に少なからぬ利益をもたらすでしょう。

国同士、国民同士の接近とその善隣関係の発展には、貿易・経済関係がいつでも貢献します。私たちは、ソビエトと日本とのこのような関係は目にみえて強化され、そしてその成果をあげていると今日満足の意をもって指摘できるでしょう。このことについて、とくに沿岸貿易の発展については、ソ連邦の市、州、地方人民代議員ソビエトと日本の都道府県の少なからぬ功績がみとめられます。

私たちの共和国だけをとってみても、日本との沿岸貿易の総取引高は、今年、1970年と比較して約8倍に増大しました。ブリヤートからは日本の会社が必要としている製品が輸出され、私たちはブリヤートの住民と工業企業がとくに必要としている製品を買い付けています。私たちとしては、今後とも、日本の貿易商社やメーカーとの貿易関係、実務協力が、相互利益を基礎として不断に強化拡張するためにあらゆる必要な対策をとっていくつもりであります。

尊敬するみなさん！

尊敬する会議参加者のみなさん！

ソビエトと日本の両国間の友好と善隣関係の発展強化、平和擁護の闘いにおける地方自治体と広範な大衆の役割は大きくまた重要であります。

私は、ソ連邦の地方（州）執行委員会議長と日本の都道府県知事との第9回会議が両国民間の平和と友好の強化の事業に重要な貢献をすることについての確信を表明いたしたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

⑥　スパンダリアン在日ソ連通商代表部首席

尊敬する皆様！

同志諸君！

先ず最初に、日ソの重要な政治家である皆様方にご挨拶の言葉を申し上げることを得ましたことを感謝致します。

貿易と経済協力は、今日ソ日関係全体において誠に重要な地位を占めておりまして、それは日ソ両国民間の真の善隣協力をつくり出すための強力な基礎であり、両国民の経済発展と福祉増進の助けとなるもので=ります。

1978年に、われわれ両国間の貿易・経済関係は、1957年12月に通商条約が調印された時から数えて三十年代目に入りました。たとえこの期間が、歴史的展望ではそれ程長いものではないとしても、この期間におけるソ日貿易・経済関係で特記される数量的・質的変化は、その活力を強調するものであり、その将来の発展の好ましい展望を予定するものであります。過去二十有余年の間に、貿易・経済協力は急速なテンポで発展致しました。

前述の期間中における商品の相互納入量はほぼ100倍に増大し、そして1978年には約40億ドルに達しました。われわれ両国間で貿=支払5か年協定の締結が開始されたとき、すなわちわれわれの貿易関係が長期的な安定した基礎に立って行われるようになったときである1966年以来、両パートナー間の商品取引は5年ごとに倍増しました。そのようにして、1971年～1975年間には商品取引高は約90億ドルとなりました。ということはその前の5か年に対して2.3倍に増大したということであります。ここ数年間の貿易実績は、1976年～

1980年間における貿易量もまたその前の5か年間の商品取引高の2倍になるであろうということを、確信をもって予想する根拠を与えるものであります。

両国間の貿易関係の重要な特質となっているのは、それを深化させ拡大させる施策の中に商取引の広範囲で実際的な経験が集積されており、また両国の社会・経済体制上の差異にもかかわらずソ連の外国貿易の各機関と日本の各社との間に強固な実務的接触が確立されているという事実であります。

今日、日本の200以上の貿易、産業、運輸会社、協会、協同組合が、40以上のソ連の外国貿易機関との契約当事者となっております。この200という数字の中には日本のすべての主要な貿易会社が含まれております。

貿易の構造の不断の向上および相互的納入商品の品目や品数の拡大が、われわれ両国の貿易関係の特徴的な姿であります。現在、ソ連邦は幾百種類の生産物を日本に輸出し、また自国に輸入しています。

1978年度の資料では、ソ連の主要な輸出品は次のような商品であります。木材（36％）、綿花（11％）、石油と石油製品（14％）、石炭（10％）、非鉄金属（7.5％）、貴金属・宝石（4％）などであります。

ソ連の対日輸出商品構造の分析は、一連のソ連商品が日本の輸入の中で顕著な地位を占めていることを示しています。すなわち、加工用材が19％、綿花が13％、カリ塩が25％、鉄鋼くずが7％、パラジウムが45％、アルミニウムが40％、石綿が7.5％、鯨肉と黒鉛が50％などであります。

日本の対ソ輸出の中では、機械・設備の割合が 57%、鉄鋼製品が 25%、一般消費物資が 18%、化学製品が 5%を占めています。

最近 2、3 年間に、ソ連市場は日本が輸出する個々の重要な商品の販路として重要な意義を持つようになったことは、とくに指摘する必要があります。たとえば、1978 年には日本の化学工業のプラントの輸出の 60%以上、また日本で生産された大口径鋼管の約 50%がソ連向けにあてられております。

総額 15 億ドル以上におよぶソ連の各機関に対する日本の銀行借款の供与は両国の貿易の発展を促進しました。すなわち、それによってわれわれは日本で化学工業の総合プラントと大口径鋼管の買付けをしました。

われわれ両国間の通常貿易とならんで、ここ数年の間にいわゆる沿岸貿易が発展しており、ソ連極東の産物と自らの製品とのバーター取引に関心を有する多数の日本の中小貿易商社、府県、協会および協同組合が沿岸貿易にたずさわっています。

この貿易の 15 年以上に及ぶ経験が、両国にとってのその必要性と効果を証明しました。この期間に相互的な商品納入量は 35 倍以上に増大し、1978 年には 7,500 万ドル以上になっています。

この問題についてのより詳細な報告は、全ソ極東輸出入公団（ダリイントルグ）総裁 V. V. コルイチェフが致します。

物々交換を基礎に、両国間で協同組合貿易といわれる貿易も行われています。ソ連側からは「全ソ消費協同組合中央連合会」を代表する「全ソ協同組合貿易公団（サユースクープウネシュトルグ)」が、日本側からは主として沿岸貿易に加入している各社がそれに参加しています。協同組合貿易の物流は昨年度は約 5,500 万ドルとなりました。

次にソ日経済協力問題に移らせて頂きたいと思います。

1965年のソ日および日ソ経済委員会設立後、ソ連の各団体と日本の関係各社は、ソ連邦の東部地区（シベリアと極東）の国民経済の各部門の発展を目指す多くの重要なプロジェクトを、共同して実施し始めました。この協力は、両国の貿易の活力と構成にますますより大きな影響を及ぼしています。

経済協力協定による相互的商品納入は、今日既に、ソ日商品取引の約20%になっていることを申し上げるだけで十分であると思います。

現在、ソ連極東の林業と製紙業、南ヤクーツク炭田開発、ヤクーチャ天然ガス資源の予備探査、サハリン大陸棚の石油・ガス探査の如きプロジェクトの実施において共同協力が行われています。

コンペンセーション（代物弁済）の性格が、ほとんどすべてのソ日経済協力プロジェクトの共通の特徴であります。ソ連経済の相応する部門の発展のため、日本の借款が供与され、それを資金としてソ連の各機関は必要な各種の設備、機械、資材、技術を入手し、わが国内で新しい林業、木材関係企業、石炭採掘場、港湾施設、鉄道を自力で建設し、石油、ガスその他の試掘を行っております。

クレジットに対応した代物納入制度(コンペンセーション)に基づき、ソ連の各組織は製材用木材、板材、工業用チップおよび広葉樹パルプ用材の対日輸出を拡大し、南ヤクート炭田開発協力協定に基づきコークス炭の納入にとりかかっております。また、ソ連領を通過する日本の貨物の輸送量を著しく増大しています。

かくして日本の各社は、一方ではその生産した設備、資材および商品に対する総額10億ドルを超える莫大な注文を確保するとともに、他

方では、長期的安定的基盤の上に、日本経済に必要なエネルギー資源、原材料その他の生産物をソ連邦から受け取るといった協力に参加しているのであります。

結論として、ソ日貿易発展の見通しと若干の諸問題に簡単に言及させて頂きたいと思います。

経済協力発展の主要な客観的前提となるものは、明白な互恵性であり、これはソ連邦と日本の経済の相互的補完性、貿易上の利益の一致、そして最後に両国の地理的近接から生ずるものです。ここにソ日経済協力＝安定性の原因およびその発展の前途の保証があるのであります。

この問題についてのソ連の態度は極めて明白であります。それは1976年8月に行われた、ソ連共産党中央委員会書記長兼ソ連邦最高幹部会議長L. I. ブレジネフと、日本経済団体連合会（経団連）代表団との記念すべき会談の中で、明瞭に描き出されています。

ソ連邦は、長期的かつ大規模な基礎に立った日本との経済関係発展、そのための10～15年を見込んだ長期の政府間経済協力協定の締結を含めたより好ましい条件の確立を希望しています。

これに関連して、本年9月末モスクワで開催されたソ日・日ソ経済委員会第8回合同会議について、私は言及せずにはおられません。この会議は両国間の経済関係の今後の発展にとって新たな重要な一歩であったと、今日確信をもって申し上げることができます。

それぞれの側からの参加者の構成自体が会議に与えられた意義を物語っています。日本代表団（約100名）の中には実業界の最も著名なリーダー、すなわち貿易商社、生産会社、銀行の代表者たちならびに日本の主要各省、各団体の代表者たちが含まれていたことを指摘するだけで

十分であると思います。ソ連の代表団も、代表者としても、また人数の点でも、それに劣らぬものでありました。

モスクワ会議では、現行の、新規の、そして将来の経済協力プロジェクトに関する最も重要な諸問題が、具体的に、かつ実務的精神の下に討議されました。

双方は、サハリン大陸棚の石油とガスの探査およびヤクーツクのガス田探査を促進する必要性について、また、バイカル・アムール幹線鉄道沿線の森林資源の開発協力、ボストーチヌイ港の特殊岸壁建設(第2次)、サハリン製紙企業の改修、アムール・カートン（板紙）コンビナートの建設（第3次）などについて基本的協定を締結する必要性について、相互理解に達しました。

上述の諸プロジェクトの実行は、今後数年間の両国間の経済協力の見通しを明確にするものであります。

会議においては、更に遠い将来を展望した協力の可能性の検討を継続して行う取り決めもまたなされました。すなわちウドカンの銅鉱床、マラジョージノエ・石綿鉱床の開発と極東における冶金コンビナートの建設がそれであります。

会議自体におけると同様に、日本代表団幹部とソ連政府要人（ソ連邦首相A. N. コスイギン、副首相N. K. バイバコフ、副首相V. A. キリリン、外国貿易相N. S. パトリチェフを含むソ連邦の多数の閣僚）との会談においても、両国間の経済協力と貿易の広範囲にわたる将来の展望について意見交換が行われました。

これに関連して、両国間の大規模かつ長期的協力のために新しい重要な客観的前提条件が生じていることを強調せねばなりません。

この点で現存する巨大な潜在的可能性が、シベリアと極東開発計画の実施に伴って増大しています。これらの計画は、従来と同様に、われわれ自身の力による開発を前提としたものでありますが、それでもわれわれの前に開かれている巨大な可能性を、正当に、かつ機を失せずに評価し、そして互恵的条件でソ連邦と協力する用意のある、日本を含む諸外国の実業界との相互協力のための余地はあります。

他方、ソ連との貿易・経済関係発展の重要性を評価しつつ、日本の実業界は、世界経済と国際貿易に生じている重大で深刻な変化（増大している赤字とエネルギー資源および多種類の原料の価格高騰、保護貿易主義傾向の増大と先進資本主義諸国の通貨制度の不安定など）を考慮せずにはおれません。

これら全ての現象は、日本の経済と貿易の上に顕著なかつ病的な影響を及ぼしつつあります。このような状況の下にあって、ソ連邦との経済協力を強化発展させることは、日本経済にとっても日本国民の福祉にとっても有利な結果だけをもたらすことができます。

ソ連との全般的な経済関係発展の諸問題（特にモスクワ会議で日本代表団が表明した具体的なソ日経済協力プロジェクト）に対する関心が増大していることは、以上のことにより説明されうるものであることは、明白であります。

現実が示していますように、ソ日貿易と経済協力の発展は、複雑な状勢の中で行われています。

この協力が、広範な、かつ長期的な基盤に立って発展するためには、その機が熟していた一連の諸問題をずっと以前に解決すべきであった、というのがソ連側の意見であります。

たとえば、ソ連邦は西欧の大多数の諸国家と長期的政府間経済協力協定を持っておりますが、それは 10～15～20 年先までのそのような協力を計画することを可能にしています。

日本とは、われわれはのような協定を持っていません。

借款条件について言えば、日本はまたその西欧の競争相手に遅れをとっています。彼等は、われわれの組織が、関係諸国で自由に機械設備の発注をすることが可能な総合的な国家的借款（ナショナル・クレジット）をわれわれに供与しています。

ソ日通商条約では、大阪にソ連邦通商代表部支部の設置が予想されていますが、しかし、われわれと日本との商品取引全体の約 25%が関西地区で占められているにもかかわらず、われわれは日本側からその点で同意を得ることができないでいます。

それと同様に、沿岸貿易の発展にとくに関心をいだいている地域（日本の西海岸と北海道）に、われわれは全ソ極東輸出入公団（ダリイントルグ）の代表部を設置することができません。

以上のことすべてが、両国間の貿易・経済関係発展の可能性を制限し、現在ソ連市場において西欧諸国の競争相手より悪い条件の下にある日本の商社に最大の損害をもたらしていることは、自明のことであります。

このようなわけで、客観的には、両国間の長期のかつ大規模な貿易・経済協力が広範かつ互恵的に発展するための大きな可能性が存在している、と結論づけることができます。しかしそのためには双方が少なからぬ努力を傾注し、双方が善意と相互理解を表明し、それに対する障害を克服し、実業界の水準におけると同様に政府間の水準においても最善の条件を創り出すことが必要であります。

ソ連側にはこれに対する用意があります。それとともに、ソ連邦の原則的立場を、日本との経済協力発展に対するソ連の特別な、あるいは一方的な関心として解釈し、さらにこの非現実的前提に立って何らかの計算を立てるのは不正確かつ大きな誤りである、ということを強調しなければなりません。

もし、日本側がわれわれと共に互恵的経済関係を発展させることを望むのであれば当方には支障はありませんが、もしも日本がそれを望まないか、あるいは今のところまだそれに対する用意がなければ、われわれは日本に何も押しつけません。

貿易・経済協力の諸問題についてわれわれがお話し申し上げましたソ連側の立場が、日本の有力な政治家である県知事各位からの理解と支持を受けることを、われわれは期待しています。と申しますのは、この立場はソ連ならびに日本の国民の根本的な利益にかなうものである、とわれわれは深く確信しているからであります。

⑦　恒松　島根県知事

日ソ両国の貿易および経済交流の促進について（主報告）

日本とソ連邦との経済関係は年々深まり、それとともに両国間の貿易が着実に拡大していることを私どもは大きな喜びとしております。

日ソ貿易の特色は、日本からソ連に機械、鉄鋼等の工業製品が輸出され、ソ連から日本には木材をはじめ石炭、非鉄金属等の原材料やエネルギーが輸入されてくるという相互補完的な貿易構造になっている点であります。この特色が日ソ両国が距離にして近いという利点と相まって、

両国の社会経済体制の相違をこえて、日ソ貿易の着実な発展をもたらしているのであります。

ご承知のとおり、日本とソ連極東地方との間のいわゆる沿岸貿易は、両国政府間の合意に基づいて1963年に始まったものであります。以来双方の努力により、1978年において1980年目標を上回るほどになり、沿岸貿易の規模は、今日まで飛躍的な拡大をとげて参ったのであります。地域貿易という特殊性に基づく各種の制約があるにもかかわらず、そのように着実な発展を示してきたことは、誠に喜ばしいことであります。

なお、この席を借りて、私が知事をしております島根県と貴国との貿易について申し上げますと、1968年に島根県日ソ貿易協同組合が設立され1969年より貿易が開始されました。貴国関係各位のご協力により年々順調に推移しております。

現在貴国から輸入いたしておりますものとしては、良質な木材、新鮮な苺ジャム、蜂蜜であり、広く県民によろこばれております。

また、本県からの輸出の主なものは繊維製品でありますが、さらに一層貿易が拡大することを念願しております。

さて、わが国の民間人よりなる第3回日ソ沿岸貿易促進使節団は、本年3月、通産省の支援を得てナホトカのダリイントルグ（極東貿易公団）やモスクワの外国貿易省を訪問し、隔意のない意見の交換を行いました。

貴国においては、ダリイントルグが本年4月に正式な公団に昇格されたと伺いました。これは貴国の沿岸貿易に対する熱意の現れであり、私どもは、強化されたダリイントルグの今後のご活躍に大きく期待いたしております。

沿岸貿易促進にとって情報の交換は不可欠の課題であります。

私ども地方自治体は、沿岸貿易と協同組合貿易を重視し、毎年多くの県や市が、両貿易振興のため見本市参加、市場調査員派遣、視察団派遣、サンプル輸出補助等について相当額の予算を支出し、尽力いたしております。

沿岸貿易および協同組合貿易を今後いっそう発展させるうえで、特に次のような改善を要する諸問題があると考えております。

その1は、両貿易におけるソ連側の対日輸出品目の拡大と安定供給であります。第2は、沿岸貿易取扱品目の中央公団への移管を控えてほしいことであります。第3は、沿岸貿易における日本側の輸入先行方式を改めて、互恵平等の精神から、輸出入同時契約にしていただきたいのであります。第4は、両貿易とも木材の輸入価格が中央の公団（エクスポルトレス）から供給される木材に比べ約5%割高であるので、それを是正していただきたいのであります。第5にりんご、みかん、なし等の生鮮果実、果実罐詰等については、わが国に輸出余力が十分ありますので、これら品目の輸出が伸びることを私どもは期待しております。

日ソの経済関係としては、貿易の他シベリア開発協力プロジェクトとしていくつかの計画がなされております。これらの計画が両国の経済発展にとって有効に促進されることを切望しております。

また、日本海に面する12府県は、1964年以来「日本海沿岸地帯振興連盟」を結成いたしております。私もその構成員でありますが、同連盟は、本年7月政府に対して、①対岸貿易国との友好促進、②対岸諸国との経済協力計画の推進、③貿易見本市の相互開催、④日本海沿岸と対岸諸国との定期航路の開設、⑤港湾施設およびわが国通商関係機関の整備拡充、⑥国内外輸送貨物の日本海沿岸諸港利用促進、⑦対岸諸国の

通商事務所開設等の要望を提出いたしました。私は連盟の運動が十分な成果を挙げ、日ソの友好関係は一層促進されるものと思っております。

日ソ間の経済関係で、日本国民の最も大きな関心事のひとつは、北方漁業であります。とくに私は、北海道・東北各県の関係漁民にとって切実な二つの問題をとりあげて皆さまに理解して頂きたいと思います。

まず第1は、ソ連側による日本漁船のだ捕・罰金徴収の問題であります。北方四島周辺水域におけるいわゆる「領海侵犯」およびソ連200カイリ内水域における協定違反を理由とするソ連側による日本漁船のだ捕につきましては、漁船員の抑留期間が長い上、とくにソ連側から課せられる罰金が異常に高額で、日本漁民を大きな不安におとしいれております。

第2の問題は、日本沿岸沖合における操業ソ連船による日本側漁民の漁具、漁網の損壊であります。日ソ両国政府が共同で設置した「日ソ漁業損害賠償請求処理委員会」に提出された賠償申請件数は、同委員が1975年発足後3年半の間に、1,000件近くに達しております。しかも、いまだにただの1件も解決がついていないのであります。

以上の2点の問題によって、現在わが国の北海道、東北等の漁民の間には、強い対ソ不信感が生まれつつあります。日ソ両国の友好親善関係の発展を望むとすれば、私はまず、そうした問題を解決することこそ一番大切なことだと思っております。

本日、ここ日本の首都東京で開かれました第9回目の日ソ知事会議におきまして、「日ソ貿易・経済関係の発展」ということが議題のひとつとして選ばれましたことはまことに有意義なことであったと思います。

日ソ間の貿易と経済関係が今後さらに発展、拡大して行くことは、両国地方行政責任者にとって、共通の深い関心事であると思います。その

共通の目的を追求して行く上において、われわれは隣邦の最も親しい友人同士として、ともに手をたずさえて歩んで行くことを切に念願いたします。

⑧　コルイチェフ・ダリイントルグ総裁の発言

尊敬する議長！　尊敬するみなさん！　同志のみなさん！

駐日ソ連邦通商代表V・B・スパンダリアン同志の報告および他の会議参加者の発言の中で強調されていたように、ソ日両国間の貿易と経済関係の発展は、ソ連邦と日本との友好関係の一層の発展と強化の事業において大きな意義をもっています。

私は、討議の課題に関して若干の事実を補足したいと思います。

1963年から、極東において対日沿岸貿易という対外政策関係の新しい形態が発展してきました。この貿易形態は、主として地元生産品がその輸出の基礎をなし、また輸入品は極東において使用されているという事実を考慮に入れると、議論の余地なき重要性をもっています。

沿岸貿易の取引高は不断に増大しています。

1965年のそれは200万ルーブル以下であったのが、1978年には5,000万ルーブルを上回っています。

取引高の増大に伴って、取引品目も拡大しており、現在それは80品目以上になっています。貿易は地理的にも拡大しています。現在沿岸貿易を行っているのはシベリアと極東のほとんどすべての地方と州で、日本側からは130以上の会社と協同組合に及んでいます。

私たちは、日本の西海岸地方および北海道の会社や協同組合（この中には「北海道日ソ貿易協会」に加盟している会社も含まれている。）と積極的な関係を保っています。

ソ連極東の諸都市との貿易において有益なイニシアチブを発揮しているのは、姉妹都市、つまり新潟、金沢、舞鶴、小樽、旭川、敦賀港その他の市長のみなさんです。

「ダリイントルグ」の貿易相手の中には、「進展実業」「東邦物産」「丸紅」「東京丸一」「日本海貿易」「前川商事」「蝶理」等があります。

日ソ貿易協会とソ連東欧貿易会の創設は、沿岸貿易の発展に顕著な貢献をしました。これらの組織に加入している40社との貿易取引高は、本年、沿岸貿易の全取引高の65%以上を占めています。

この事業において積極的な役割を果したのは、1973年と1978年に東京で行われた沿岸貿易会議、1973－74年日本で公開された「社会主義シベリア」博、近年ハバロフスク、イルクーツク、ナホトカで開催された日本商品見本市といった共同の諸行事です。

私たちは織物、衣料、メリヤス、はきもの、陶器の食器、自動車、ワイヤロープ、電卓、金属性倉庫、化学工業の各種製品などの日本からの購入をたえず増大しています。取引品目の一層の拡大、沿岸貿易による日本への注文の増大の見通しがあります。

輸出入の業務に携わるほかに、私たちは沿岸貿易に関連する他の活動も行っております。例をあげてみましょう。ナホトカ市やその他の都市で、定期的にセミナーが持たれています。このセミナーでは、ソビエトと日本の専門家が、輸出品の生産に関して、また特定の機械類や設備の操作や修理に関して、経験の交換を行います。

「ダリイントルグ」は将来、木材の製品および半加工品の日本への供給量を増加する計画をもっています。また、雲母、陶土、砂利、砕石、砂その他の鉱物原料産地の工業的開発にも関心があります。

1976年からは、沿岸貿易における資材・技術志向型の商品の比重が輸入全般の中で著しく増大しています。このことは、輸入の拡大と、それに対応して生産財の品目の拡大を可能にする非常に重要な要因であります。そしてこれらのことは、輸出用商品の生産条件の改善を促進し、その品質の向上を助長するでありましょう。

輸入における生産むけ商品のシェアの増大は、総合的施設の買付けのため、また、新しい輸出用企業の組織のため、より広範な可能性を開きます。このような例は沿岸貿易の実際においてすでに存在しております。例えば、工業用チップ生産のための設備、大理石採掘と加工用の施設、木材加工工作機械などの買付けです。この経験をさらにいっそう広めることは経済的な合目的性を有しています。

沿岸貿易のわく内で、コンペンセーション契約、つまり日本から機械および総合施設をクレジットで買い付け、その後出来た製品によってクレジットを償却してゆくコンペンセーション契約の実現は大きな関心を呼んでいます。この貿易形態は、沿岸貿易の発展に量だけではなく質的にも新しい貢献をもたらします。それは私たちの考えでは双方の関心と努力に値すると思います。

全ソ公団「ダリイントルグ」と日本の貿易商社は、これまで積みかさねてきた経験を生かしながら、両国間の沿岸貿易の良好な将来性を正しく評価すべきであります。私たちは、双方が、とくに日本の企業が、新しい商品に対し積極的に働きかけ、協力形態を拡大し、今までの契約方法よりもより効果的なものを探求してゆけば、沿岸貿易はごく近い将来に少なくとも倍加できると確信しています。

日本からの輸入品について述べれば、購入量の増大および品目の増加

とともに、残念ながら、近年、品質不良の商品（とくにはき物、既製服、メリヤス製品など）の納入量がやや増えていることを指摘しないわけにはいきません。

沿岸貿易が量的にも質的にも成長している事実を考慮しつつ、ソビエト領内で活動している日本の企業や貿易協会の多くの代表部の例にならって、「ダリイントルグ」代表部を日本の一都市に開設することの合理性と必要性の問題を再度ここに提起したいと思います。

最後に、この会議で行われた意見の交換が、過去における経験と同様に、ソビエトの極東・東シベリア地域と日本の府県や都市との間の貿易・経済関係ならびに沿岸貿易の一層の発展に貢献するという確信を表明させていただきたいと存じます。

ご清聴ありがとうございました。

⑨　長洲神奈川県知事

日ソ両国の貿易および経済交流の促進について

親愛なるコズロフ団長、　親愛なる団員の皆さん。

ようこそいらっしゃいました。ソ連知事団の来日を心から歓迎いたします。

私は、1977年8月、モスクワで開かれました日ソ知事会議に、日本代表の1人として参加いたしました。この会議は、日ソ友好を深める上で、きわめて有意義なものであったと確信しております。この会議の成功のために、ソ連の友人の皆さんが払われたご努力に対し、この機会に改めて厚くお礼申し上げます。

モスクワ、レニングラード、ボルゴグラードの諸都市でソ連の友人た

ちと過した楽しく、有意義な日々が、つい昨日のことのように鮮やかに想い起こされます。この時、共に語り合った古い友人の皆さんが、今回、ソ連知事団のメンバーとして来日されたことを、心からうれしく思います。

さて、日ソ両国は、互いにもっとも身近な隣人であります。したがって、私たちの最大の課題は、日ソ両国間の平和と友好関係をたえず維持し、発展させることであります。また、日ソ両国は、政治的、経済的、文化的な面で、世界に対して大きな影響力をもっています。したがっ日ソ両国の平和と友好関係の発展は、アジアと世界の平和のために、また人類の進歩と繁栄のために不可欠の条件であります。

しかしながら、日ソ関係の現状は、日ソ双方にとって必ずしも満足すべき状況にありません。経済交流の面でも、文化交流の面でも、最近若干の停滞が見られるのは誠に残念であります。今こそ、日ソ関係の長期的展望に立った関係改善へ向けて、双方が真剣な努力を開始すべきであります。経済交流、文化交流の強化に加えて、政治関係の改善がとくに重要な課題となっていることは、いうまでもありません。この意味で私は、1980年代における日本のもっとも重要な外交的課題のひとつは、日ソ関係をいかに改善し、発展させるかにあると考えております。

こうした日ソ関係の新しい発展のために、今回の日ソ知事会議が大きな役割を果たすことを心から期待するものであります。日ソ関係の新しい発展のためには、国レベルの交流を強化するだけでなく、地方レベル、民衆レベルの交流を一層拡大することが重要であります。私はこのために、全国知事会の友人の皆さんと力を合わせて、今後とも一層の努力を重ねていくことをお誓いして、私の発言を終ります。

⑩　ロマキン・ボルゴグラード州執行委員会議長

尊敬する議長さん！

尊敬するみなさん、同志のみなさん！

ソビエトの代表団員がすでに発言したように、私もソビエトの地方（州）執行委員会議長と日本の都道府県知事との第9回会議に参加できたことを嬉しく思っております。

すでにここで指摘されたように、この会議は、西側の、また東側の一定層の人々が、「ソビエトの戦争の脅威」という神話のもとにその国際政策において「冷たい戦争」の精神の復活を企てている時期に開催されています。私たちは、ソビエトがどんな場合にも誰に対しても脅威を与えたことはなかったし、また現在も与えていないということを、完全な責任をもってここに声明するものです。それは広範な世論を意識的に欺瞞しようとするものに他なりません。

アジアをはじめとする地球の他のすべての地域においてソビエトは堅固な平和の達成に努力をしているのです。これこそ私たちの外交政策の根本的な基盤であり、その中心的なバックボーンなのです。この政策をソビエトは遅滞なく一貫してとっているのです。

諸国民間の相互理解の発展にボルゴグラード州も一定の貢献を果しています。私たちの州の平和な都市と農村は、第二次世界大戦における最も大規模で最も激烈な戦闘の一つであったスターリングラードの戦闘（200日間昼も夜も続いた）の舞台となったことは周知のとおりです。スターリングラードでのヒトラーの大軍の壊滅は、戦争の形勢が根本的に転換する端緒となりました。ファシスト侵略軍に対する勝利は高価な犠牲を伴いました。多くの都市や農村は破壊され、2,000万のソビエト

の人びとが犠牲となりました。しかし、ソビエト国民はもちこたえ、そして勝利をかちとり、破壊された国土を復興したのです。英雄的なボルゴグラードも廃墟と灰のなかから立ち上がり、またソビエト全体もこれを復興させたのです。比較的短期間の間にボルゴグラードは産業と文化の一大センターとなりました。250 万人の人口をもつボルゴグラード州はわが国の先進的な工業・農業地域のひとつとなりました。

工業生産高は戦前の水準と比較して 20 倍以上にのびました。機械製作、金属加工業、鉄鋼および非鉄金属工業、化学および石油化学工業、電気エネルギー、建設資材工業、繊維工業、軽工業、食品工業、木材加工業といった分野が大きな発展をとげました。

農業分野においても顕著な発展がみられます。わが州は、穀物、野菜、畜産製品の一大供給地であります。

土地改良の広範な計画が実施されております。運輸と通信も発達しています。

わが州の経済の発展は、勤労者の福祉の一層の向上を保障しています。

教育を受ける権利についてのソ連邦憲法の規定にのっとって、わが州では約 50 万人の人々が高等あるいは中等教育機関で勉強しています。住民の健康を守るために、300 の医療機関と 8,000 人の医師がその任にあたっています。州の住民には文化的休養のための広範な機会が与えられています。

年金や扶助料を受給しているのは 50 万人に及んでいます。これはソビエトの人々の生活水準の向上のために党と政府が示した配慮の結果です。

一言でいえば、私たちは誇るべきもの、保護し大切にすべきものを持

っています。ボルゴグラードっ子は戦争とは何かをよく知っており、それが国民にいかなる災厄と破壊をもたらすかをも知っているからこそ、私たちは戦争が二度とくりかえされないよう、できるだけのことをしているのです。広島と長崎へのアメリカの原爆投下という悲惨をなめた日本国民も、戦争の結果と恐ろしい犠牲を知りすぎるほど知っています。

残念ながら、熱核戦争の悲惨をすべての人が理解しているわけではなく、そしてその防止のための十分な対策も講じられていません。今日に至っても核兵器拡散防止条約に加わっていない国があります。それ以上に、中国は軍事力の最大限の拡張を主張し、アジアに限らず、いずこでも紛争状態を創りだしています。しかし私たちには平和が必要であり、諸国民間の友好の強化は堅固な平和の保障であります。この目的のためにこそソビエトの国民は世界の多くの国ぐにの勤労者と広範な接触を保っているのです。

これらの接触のうち重要な地位を占めているのは日本との交流です。それは、日本の国会議員団がはじめてソビエトを訪問した 1958 年にはじまりました。ボルゴグラードと広島の両都市の間に友好関係が樹立され、成功裏に発展し、その後 1964 年に姉妹都市関係が確立されました。

この協力形態は、ボルゴグラード市ソビエト執行委員会と広島市役所との文通と代表団の交流、写真・映画・文学の交換、友好の夕べ、懇談会、講演会の開催、児童絵画コンクール、日本語とロシア語の学習その他きわめて多様な形の関係の成功的な発展を可能にしています。

協力と善隣の真の祭典となった広島とボルゴグラードの友好の旬間と週間は、私たちの両市において大きな成功のうちに過ぎました。これに劣

らぬ成功をおさめたのは、広島市におけるボルゴグラード友好の日で、これには市ソビエト議長を団長とするボルゴグラード代表団が参加しました。友好関係の一層の発展計画を討議するために、広島市長を団長とする代表団が近く訪れることになっています。

これらすべての対策は、お互いをよりよく知り合い、平和擁護の闘いにおける私たちの努力の統合を促し、日本とソビエトの両国民間の友好の強化を促進させます。

私たちの都市と州には他の日本の代表団も訪れます。2年前、私たちは州・地方執行委員会議長およびロシア共和国閣僚会議議長との伝統的な第8回会議に参加された日本の県知事の代表団をお迎えしました。

日本との交流関係発展のために、私たちの州の多くの社会団体が貢献をしています。

日本とボルゴグラードの労働組合組織の間のよき相互関係が確立されています。1975年に私たちの都市で、「日本・ソビエト両国民間の平和と友好のために！」というスローガンのもとにソ日労組の第10回集会が開かれ、これは勤労者の連帯の真の大集会となりました。今年は総評、中立労連、全日本港湾労組の代表団が来訪しました。1965年からは広島県の労働組合と緊密な関係が樹立されています。代表団の相互交流が定期的に行われています。

ボルゴグラードにおいても、また日本においても、企業の視察、労働者との会合、労働組合活動家との懇談、勤労者の生活の紹介、労働組合の活動方式と形態の紹介などは、疑いもなく相互理解の深化を促進し、平和の事業に貢献しています。

青年団体の間の交流も実現しています。たとえば日本の青年団体に、

わが州のコムソモール（共産青年同盟）組織の活動に関する資料が渡されました。1975年には日本からの「友好の船」の皆さんがボルゴグラードの青年たちに暖かく迎えられました。

日本との関係発展にはわが州の子供たちも参加しています。ボルゴグラード市のピオネール宮殿と広島鶴の会、そしてボルゴグラードの第50学校と広島のある学校との間で友好的な文通が行われています。また児童絵画展の相互交換が行われました。私たちはこの交流関係をとくに喜んでいます。国際児童年にあたって重ねて強調したいことは、子供たちは私たちの未来であるということです。諸国民間の善隣関係と協力を発展させることによって、私たちは地球の平和な将来を保障することができるのです。

ソ日関係の発展において大きな役割を果しているのはソ日協会のボルゴグラード支部です。多くの企業と組織がそれに団体加盟しています。日ソ協会の広島支部その他の日本の友好団体と恒常的な関係が保たれています。ソ日協会は、ソ日協力の枠内で行われるすべての行事に、最も広範な世論に呼びかけながら積極的に参加しています。

日本との経済関係もまた広範な発展をみています。私たちの企業でも日本の設備が良好に使用されています。原料と資材の相互供給が実現しています。

私たちは、ソビエトの企業にとっても、日本の会社にとっても、このような関係は相互に有益であると考えています。

諸国民間の友好強化に大きな役割を果しているのは相互理解の達成と強化を促す文化関係です。近年、「宝塚歌劇団」、「ロイヤル・ナイツ」、「ボニー・ジャックス」などの日本の軽演劇チームがボルゴグ

ラードで公演しました。州の映画館のスクリーンには、日本映画やソ日合作映画が成功裏に上映されました。私たちの州の最も幼い観客たちは、大きな喜びをもって日本の動画映画を鑑賞しました。画家たちの間でも創作的な交流が行われています。

日本とわが州とのスポーツの関係も発展しています。昨年のバレーボール世界選手権予備戦の際、ボルゴグラードっ子たちは日本のスポーツマンたちの技倆に感嘆の念を禁じえませんでした。

私たちの交流において重要な地位を占めているのはツーリズムです。この3年間だけでも日本から約1,000人のツーリストがボルゴグラードを訪れました。私たちは訪問客たちを英雄都市ボルゴグラードの名所旧跡に案内し、また彼らに私たちの労働と文化の成果やソビエト人の生活状態を紹介したりします。とくに日本からのツーリストの皆さんは、わが国の保健、国民教育、学齢前児童教育などの制度や、また環境保護に関する私たちの経験に大きな関心を示します。ボルゴグラードっ子も日本国民の生活と業績に大きな関心を寄せています。

私たちは、多面的なソ日協力の一部であるこのような各種の交流は私たち両国と両国民の相互理解の強化を促進し、地球上の平和強化の事業において共同の貢献をなしていると考えます。平和こそ人類にとって最も＝重な財産です。私たちは、「わが地球を保存し、これを核の火事の炎で片輪にすることなく、そのすべての富と美をそのまま若い世代に引き継ぐこと――このことに人類の思考が向けられるべきであると私たちは確信する」と疲れを知らぬ平和の闘士であるソ連共産党中央委員会書記長、ソ連最高会議幹部会議長L・I・ブレジネフ同志が述べた言葉を想起したいと思います。私たちにとっても日本の仲間のみなさんにとってもこの言葉

は等しく近いものであり理解できるものであると思います。平和の擁護と強化という気高い目的の実現はすべて善意の人々の義務です。私たちはこの会議もまたこの重要な目的の達成を促進するものと期待いたします。

ご清聴ありがとうございました。

7　両国知事代表閉会あいさつ

(1)　日本知事代表　西沢長野県知事

日本側の知事団を代表いたしまして、一言閉会のごあいさつを申しあげます。

本日は、予定されました時間を大幅に超過をいたす長時間にわたり熱心なご討議が行われましたけれども、皆様方にはさぞかしお疲れであろうとお察しを申しあげる次第であります。

今回は、日ソ両国の文化友好関係の促進の問題と貿易および経済交流の促進という重要なテーマを中心にいたしまして終始熱心なご討議が行われたのでありまして、問題点は若干のすれちがいはありましたけれども、しかしほとんどこの大きな問題が解明されたものと存じましてご同慶にたえません。

本日の会議におけるこの成果は、今後における地方行政の推進にあたり、大いに役立ちますことはもちろんでございますけれども、さらに日ソ両国の相互理解と友好親善の進展に必ず大きな貢献をするものと確信をいたします。この会議がかくの如く実り多い成果をあげ得ましたことは、ひとえにご出席の両国の知事はじめ関係各位のご努力、ご協力の賜でありまして、心から敬意と感謝を申し上げる次第であります。

次回は、私どもの日本側の知事団が貴国を訪問することになろうと存じますけれども、皆様方と再びお会いできる日を今から期待をいたし楽しみにいたしております。

最後に、日ソ知事会議の一層の発展とご出席の皆様方のご多幸、ご健康をご祈念申しあげまして閉会のごあいさつといたします。

ありがとうございました。

⑵　ソ連知事代表　コズロフ・モスクワ州執行委員会議長

私たちの代表団の名において、日本を訪れるご招待をいただきましたことについて、あらためて感謝の意を表したいと思います。

今回の意見の交換は、われわれのあらゆる交流、経済協力、文化交流を強化させるために、ひとつの動機となると期待しております。

最後に、1981年にわが国で行われる次の日ソ知事会議にご招待いたしたいと思います。

8　閉　　会

奥田会議議長は日ソ知事会議の閉会を宣言した。

〔付〕　　1．記　者　会　見

〔日　時〕　昭和 54 年 11 月 16 日（金）　17 時 30 分～18 時

〔場　所〕　都道府県会館　　311 号室

〔出席者〕　ソ連側　ソ連知事団　全員

日本側　読売、時事、毎日、朝日、共同、西日本、北海道

〔会見概要〕

㊐　お疲れのことと思うが、30 分程お願いしたい。まず会議全体の印象はどうか。

㊟　（団長）私は日ソ知事会議には今度で 3 度目の参加だが、会議の特徴として　それは両国間の経済、文化交流の発展に寄与してきたと思う。また私は日本知事団の方々をよく存じあげている。昔からの知人という感じがする。今後、好ましい方向で交流が発展していくことを期待したい。

㊐　今後日ソ間の貿易で伸ばしていける品物としてどういうものがあるか。日本ではとくに資源、エネルギーに関心がある。

㊟　（団長）たとえば黒炭の計画的輸出等が考えられる。

（コルイチェフ）相互貿易における将来の規模は、今後石炭やサハリンの石油等の開発が進んで行く過程で具体的になってくると思う。

㊐　具体的な数字は現在はないのか。

㊟　（団長）資源は豊富にある。しかし輸出については長期的な協定に基づいて計画的に進めることが望ましい。とくに隣国である日本との協力による資源の開発、たとえばサハリンの石油資源等の開発に期待している。

㊐　北方領土問題の解決は日本国民の念願だが、ここにご出席の知事の中で、こういう小さな島は日本に返してやってもよいとお考えの人はないだろうか。

答　（団長）知事の中にも、ソ連国民の中にもそういう者はいない。

問　どうかこの国民の悲願をあなたから政府へ申し伝えてほしい。

問　わが国では就任してから8期目の知事もいる。貴国には知事の任期はあるのか。

答　（団長）ソ連では在任期間に制限はないが、2年半ごとに選挙がある。私はモスクワ州知事を17年間やっている。団員の1人スシコフ知事は20年間知事をつとめている。

問　わが国では、日ソのほかに日米、日中の知事交換が行われているが、貴国では日本以外の国との間に知事レベルの交流はあるか。

答　（団長）米国の知事とは系統的に会議を行っている。2年ごとに実施している。これ以外には姉妹都市関係で互いの交流が行われている。

問　文化、人的交流では、日本から年間約1万6,000人訪ソしており、ソ連からは約6,000人来日しているようだが、もっと多くのソ連人が日本へ来てほしいと思う。何か訪日人員の拡大策を考えているか。

答　（団長）最近ソ連ではツーリストの海外旅行は増えている。日本は隣国ではあるが、ソ連の西部から日本までは旅費が高い。極東地域から日本への旅行は簡単だと思う。

問　成田空港の印象はどうだったか。

答　（ニキーチン）私は今回はじめて日本にきたが、成田空港についていえば日本の印象はよかった。東京の天気からも良い印象を受けた。

2. ソ連知事団滞在日程

⑴　総　　括

日数	月　日（曜）	滞在都府県	摘　　要	宿　　舎
1	昭和54年（1979年） 11月14日（水）	東　　京	9：35成田着（アエロフロート577便）	帝国ホテル （東京）
2	11月15日（木）	東　　京	要人会見および都内視察 夜在日ソ連大使館レセプション	帝国ホテル （東京）
3	11月16日（金）	東　　京	午前要人会見，午後第9回日ソ知事会議 夜全国知事会会長主催晩さん会	帝国ホテル （東京）
4	11月17日（土）	東京・京都	8：24東京発、11：17京都着 （ひかり125号）	都ホテル （京都）
5	11月18日（日）	京都・奈良	朝　京都発（バス）、奈良へ	奈良ホテル
6	11月19日（月）	奈良・鳥取	14：35大阪発（ANA）、15：25鳥取着	ホテルニュー オータニ鳥取
7	11月20日（火）	鳥取・島根	バスにて鳥取県から島根県へ	ホテル一畑 （松江）
8	11月21日（水）	島根・東京	17：25出雲発（TDA）、18：25大阪着 20：00大阪発（JAL）、21：00羽田着	帝国ホテル （東京）
9	11月22日（木）	東京・神奈川	朝　東京発（バス）、神奈川県へ	横浜プリン スホテル
10	11月23日（金）	神奈川・東京	バスにて神奈川県より帰京	帝国ホテル （東京）
11	11月24日（土）	東　　京	13：00成田発（アエロフロート582便）	

⑵　日　　別

11 月 14 日（水）第 1 日

（東　京　都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
9：35	成田空港着	アエロフロート航空 577 便	空港特別合室（N-8、9 号室）にて歓迎式（9：55～10：15） 主な出席者：奥田会長、松島総長、ポリヤンスキー大使等 ロビーで記念撮影
10：28	同　上　発	バ　ス	
12：10	帝国ホテル着		昼食（中 2 階　グリル） （13：00～14：00）
14：32	同　上　発	バ　ス	
14：58	ソ連大使館着		ソ連大使館訪問（ブリーフィング）
16：23	同　上　発	バ　ス	
16：40	帝国ホテル着		小　憩 夕食（17 階　レインボールーム） （18：00～17：05） 主な出席者：松島総長等 〔帝国ホテル泊〕

11 月 15 日（木）第 2 日

（東　京　都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
10：42	帝国ホテル発	バス	
11：00	農林水産省着		武藤嘉文　農林水産大臣会見（11：00～11：20）
			同席者：松浦　昭　経済局長
			大神延夫　国際企画課長
			赤保谷明正　貿易関税課長
			真坂道天　水産流通課長
			山口　昭　水産課長
			中島　達　水産庁国際課長
11：20	同上発	バス	
11：25	外務省着		高島益郎　外務事務次官会見（11：25～11：45）
			同席者：兵藤長雄　東欧第一課長
			末沢昌二　地域調整官（通訳）
11：45	同上発	バス	
11：55	帝国ホテル着		昼食　（グリル）（12：30～13：30）
13：50	同上登	バス	
14：00	自治省着		後藤田正晴　自治大臣会見　（14：00～14：30）
14：30	同上発	バス	
15：00	NHK着		NHK 施設視察（15：00～16：00）
			面会者：橋本忠正　専務理事（国際関係担当）
			小池悌造　広報室長ほか
16：00	同上発	バス	
16：30	通商産業省着		佐々木義武　通商産業大臣会見（16：40～17：00）
			同席者：宮本四郎　通商政策局長
			諸富忠男　南アジア東欧課長
17：00	同上発	バス	
17：15	帝国ホテル着		小　憩
18：10	同上発	バス	

11 月 15 日（木）第 2 日（続き）

（東　京　都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
18：30	ソ連大使館着		ソ連大使主催レセプション （18：30～20：00）
20：01	同上　　発	バス	
20：10	帝国ホテル着		

11 月 16 日（金）第 3 日

（東　京　都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
9：15	帝国ホテル発	バス	
9：30	東京都庁着		東京都庁表敬訪問（2 階特別応接室）（9：30～9：50） （面会者：野村鋲市副知事 野見山修一外務長）
9：50	同上発	バス	
10：10	国会議事堂着		岡田春夫　衆議院副議長会見（議長応接室） （10：10～10：30） （同席者：浅羽満夫・渉外部長） （このあと参議院本会議を傍聴）
11：10	同上発	バス	
11：15	総理官邸着		加藤紘一・内閣官房副長官会見（11：20～11：40） （同席者：兵藤長雄・外務省東欧第一課長 末沢昌二・地域調整官（通訳））
11：40	同上発	バス	
12：00	帝国ホテル着		東京都主催昼食会（4 階松の間）（12：00～13：30） （同席者：野村鋲市・副知事 浅羽満夫　外務長）
13：40	同上発	バス	
13：55	都道府県会館着		第 9 回日ソ知事会議 （別館 211 号室　14：00～17：30） 記者会見（別館 311 号室　17：30～18：00）
18：00	同上発	バス	
18：20	帝国ホテル着		小憩 奥田良三・全国知事会会長主催晩さん会 （立　食　式） （亀の間　19：00～20：30）

11 月 16 日（金）第 3 日（続き）

（東　京　都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
			〔主な出席者〕 新潟、埼玉、神奈川、長野、三重、奈良、鳥取、広島各県知事、北海道（寺田）、東京（野村）富山（巣山）、滋賀（前川）、京都（荒巻）、愛知（鈴木）各副知事、松島知事会事務総長、ポリヤンスキーソ連大使、コマロフスキー参事官、森岡自治事務次官、武藤外務省欧亜局長、兵藤東欧一課長、田中王子製紙社長、瀬戸ソ連東欧貿易会常務、大久保日ソ貿易協会事務局長槇・ハバロフスク会事務局長その他 〔帝国ホテル泊〕

11 月 17 日（土）第 4 日

（東京都・京都府）

発着時刻	発着地	交通機関	行事
8：02	帝国ホテル発	バス	
8：09	東京駅着		
8：24	同上発	ひかり 125 号	
11：17	京都駅着		セルゲイ・アニシモフ総領事等出迎え
11：30	同上発	バス	
11：42	京都府庁着		林田悠紀夫・京都府知事表敬訪問 〔11：45～12：25　知事会見 12：27～12：38　記都会見〕
12：39	同上発	バス	
12：54	都ホテル着		昼食（13：15～14：08） 同席者　荒巻＝一副知事 アニシモフ総領事等
14：33	同上発	バス	
14：50	二条城着		二条城参観 説明者：高橋　誠・元離宮二条城専務所長 （庭園内で野点を参観）
15：50	同上発	バス	
16：06	竜安寺着		竜安寺参観 説明者：田畑静水・竜安寺執事
16：39	同上発	バス	
17：26	都ホテル着		小憩 林田京都府知事主催晩さん会 （19：00～21：03） 〔都ホテル泊〕

11 月 18 日（日）第 5 日

（京都府・奈良県）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
8：58	都　ホ　テ　ル　発	バ　　ス	
10：19	東　　大　　寺　　着		大仏殿、三月堂、二月堂参観
			説明者：佐保山堯春・大仏殿主任　ほか
11：41	同　上　　発	バ　　ス	
11：43	飛　　火　　野　　着		鹿寄せ見学
			デモンストレーション：鹿愛護会・谷　正彦氏
11：55	同　上　　発	バ　　ス	
12：01	奈　良　ホ　テ　ル　着		昼　食
			同席者：上田　繁：副知事等
			（昼食後　花嫁とならんで写真をとる）
14：05	同　上　　発	バ　　ス	
14：28	天　理　大　学　着		図書館、ロシア語学科研究室等視察
			あいさつ：植田英次・天理大学図書館長
			説明案内：小畠雅敏・ロシア語学科助教授
15：08	同　上　　発	バ　　ス	
15：26	みかん栽培農家		みかん狩り
	（桜井市）着		案内：農業限田嘉史郎氏
16：00	同　上　　発	バ　　ス	
16：33	奈　良　ホ　テ　ル　着		小　憩
17：48	同　上　　発	バ　　ス	
17：51	菊　　水　　楼　　着		奥田奈良県知事主催晩さん会（18：00～21：10）
			（アニシモフ総領事等　同席）
21：18	同　上　　発	バ　　ス	
21：21	奈　良　ホ　テ　ル　着		奈良県紹介映画観覧　（21：26～21：55）
			〔奈良ホテル泊〕

11 月 19 日（月）第 6 日

（奈良県・鳥取県）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
8：58	奈良ホテル発	バ　ス	
9：01	奈良県庁着		奥田良三・奈良県知事表敬訪問
			〔9：05～9：40　知事会見 9：45～9：57　記者会見〕
10：05	同上　登	バ　ス	
10：21	シャープ（株） 郡山工場着		工場施設（電卓・複写機工場）視察 説明案内：戸部　亮・シャープ（株）専務取締役・ 産業機器事業本部長
11：20	同上　発	バ　ス	
12：55	大阪空港着		昼食（大阪エアポートホテル 3 階 コーヒーショップ） （13：00～13：55）
14：35	同上　発	ANA295 便	アニシモフ総事等　見送り
15：25	鳥取空港着		西尾邑次副知事ら　出迎え
15：32	同上　発	バ　ス	
15：45	鳥取県庁着		平林鴻三・鳥取県知事表敬訪問
			〔15：50～16：40　知事会見 16：41～16：50　記者会見〕
16：53	同上　発	バ　ス	
17：00	ホテルニューオータニ 鳥取着		小　憩 平林鳥取県知事主催晩さん会 （18：00～20：00） 〔ホテルニューオータニ鳥取泊〕

11 月 20 日（火）第 7 日

（鳥取県・島根県）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
9：00	ホテルニューオータニ鳥取発	バス	
9：10	エフワン（株）工場 着		縫製工場施設視察 説明案内：吉岡利固エフワン（株）社長
10：10	同上発	バス	
10：30	鳥取大学付属幼稚園着		幼稚園施設視察 説明案内：園長・豊島吉則教授
11：10	同上発	バス	
12：10	ステーキハウスとうはく着		昼　食
13：10	同上発	バス	
14：20	鳥取県中小家畜試験場着		施設視察 あいさつ：磯田俊二・西伯町長 説明案内：川上剛延 試験場長
15：20	同上発	バス	
16：00	境港着		港湾施設視察（車中より） 説明：長谷川和夫・境港港湾管理委員会事務局長 （クリフツォフ大使館員は別行動で米子から松江へ直行）
16：10	境大橋着		
16：15	同上発		島根県に引継ぎ
17：30	ホテル一畑（いちばた）着		小　憩 恒松制治・島根県知事主催晩さん会 （18：00～20：00） 〔ホテル一畑（いちばた）泊〕

11 月 21 日（水）第 8 日

（島根県・東京都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
8：50	ホテル一畑発	バス	
9：00	島根県庁着		恒松島根県知事表敬訪問 〔9：00～9：45　知事会見 9：45～10：00 記者会見〕
10：00	同上発	バス	
10：30	佐藤造機着		農業用機械工場視察 説明案内：佐藤造機（株）島根事業所長　小仁子（こにご）　登 （ボドガエフ知事とコルイチュフ総裁とはこの間、湖北ベニア（株）富士見工場訪問）
11：45	同上発	バス	
12：15	ホテル一畑着		昼食（2 階　菊の間）
13：00	同上発	バス	
13：15	シャミネ（松江駅構内）着		
13：50	同上発	バス	
14：40	安部栄四郎氏宅着 （人間国宝） （八雲村別所）		紙すき場等視察
15：30	同上発	バス	
15：40	原徳スーパー古志原店着		スーパーマーケット視察
16：00	同上発	バス	
17：00	出雲空港着		
17：25	同上発	TDA618 便	
18：25	大阪空港着		夕食（大阪エアポートホテル 3 階コーヒーショップ）
20：00	同上発	JAL128 便	
21：00	羽田空港着		
21：10	同上発	リムジンバヌ	
22：50	帝国ホテル着		〔帝国ホテル泊〕

11 月 22 日（木）第 9 日

（東京都・神奈川県）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
			共同声明調印式 （4 階　楓の間　8：30～9：00） 主な主席者：奥田会長、松島総長等
9：00	帝国ホテル発	バス	
9：50	東芝科学館着		施設視察 説明案内：本郷孝信館長
10：50	同上発	バス	
11：25	日本鋼管京浜製鉄所着		工場施設視察および昼食 説明案内：増田賢治副所長
14：35	同上発	バス	
14：55	川崎港着		
15：00	同上発	船	海上より港湾施設視察 説明：楠部正雄・横浜市港湾局建設部長
15：35	横浜港着		
15：35	同上発	バス	
15：40	神奈川県庁着		長洲一二・神奈川県知事表敬訪問 15：45～16：15　知事会見 16：15～16：30　記者会見
16：30	同上発	バス	
17：10	横浜プリンスホテル着		長洲神奈川県知事主催晩さん会 （18：00～20：10） 〔横浜プリンスホテル泊〕

11 月 23 日（金）第 10 日

（神奈川県・東京都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
8：00	横浜プリンスホテル発	バ　ス	
9：10	ソ連大使館着		
10：10	同　上　発	バ　ス	
10：30	帝国ホテル着		自由行動
			昼食　（中 2 階　グリ）
17：57	帝国ホテル着	大使館の	
		バ　ス	
18：20	ソ連大使館着		ソ連大使館訪問
			大使とともに夕食
20：40	同　上　発	大使館の	
		バ　ス	
21：00	帝国ホテル着		団長室にて
			事務局員とお別れパーティー
			〔帝国ホテル泊〕

11 月 24 日（土）第 11 日

（東京都）

発着時刻	発　着　地	交通機関	行　　事
5：45	帝国ホテル発	バス	
6：00	東京都日居卸売市場着（築地市場）		施設視察 説明者：野川武男築地市場長ら
7：14	同上発	バス	
7：25	帝国ホテル着		朝食、小憩
10：00	同上発	バス	
11：15	成田空港着		空港特別待合室（N―5 号室）にて歓送 主な見送人：松島総長、ポリヤンスキー大使等 税関入関（入口で歓送）
12：13	（入関）		税関入関（入口で歓送）
13：00	同上発	アロエフロート 582 使	帰国

(3)　ソ連知事団地方視察随行者

訪問府県	月　日	随行者職氏名
京都府 奈良県 鳥怪県	11月17日～18日 11月18日～19日 11月19日～20日	在日ソ連大使館員　A. V. クリフツォフ 全中知事会渋外部長　安　達　勇 同　副部長　柳　田　躬　嗣 通　訳　堀　江　豊（ソ連総合貿易（株）社長） 通　訳　中　山　久　恵（日本交通公社ロシア語ガイド） 添乗員　高　尾　六　男（日本交通公社外人旅行事業部欧亜課主任）
島根県	11月20日～21日	在日ソ連大使館員　A. V. クリフツォフ 全中知事会渋外部長　安　達　勇 通　訳　堀　江　豊 通　訳　中　山　久　恵 添乗員　高　尾　六　男
神奈川県	11月22日～23日	在日ソ連大使館員　A. V. クリフツォフ 全国知事会事務局次長　瓦　井　光　司 同　渋外部主事　金　子　正　夫 通　訳　中　山　久　恵 添乗員　高　尾　六　男

3．第9回日本都道府県知事とソ連邦地方・州人民代議員ソビエト執行委員会議長との会議（第9回日ソ知事会議）開催に関する共同声明

日本全国知事会の招待により、1979年11月14日から24日までソ連邦地方（州）執行委員会議長代表団（ソ連知事団）が日本に滞在した。

11月16日、東京において、日本都道府県知事とソ連邦地方・州人民代議員ソビエト執行委員会議長との第9回定例会議が開催された。

会議には、ソビエト側から

モスクワ州執行委員会議長　N・T・コズロフ（団長）
ブリヤート自治共和国首相　V・B・サガノフ
ハバロフスク地方執行委員会議長　G・E・ポドガエフ
ボルゴグラード州執行委員会議長　Y・I・ロマキン
サラトフ州執行委員会議長　N・S・アレクサンドロフ
チユメニ州執行委員会議長　V・V・ニキーチン
ウラジーミル州執行委員会議長　T・S・スシコフ
ベルゴロド州執行委員会議長　A・F・ポノマリヨフ
ソ連邦科学アカデミー極東研究所先任研究員　B・A・ボロージン（代表団顧問）
全ソ輸出入公団「ダリイントルグ」総裁　V・V・コルイチエフ
全ソ対外友好文化交流団体連合会極東部長　S・P・ハーリン（代表団事務長）

が参加した。

日本側からは、この会議に

奈良県知事　奥田良三（全国知事会会長）
長野県知事　西沢権一郎（全国知事会副会長）
山形県知事　板垣清一郎
新潟県知事　君健男
埼玉県知事　畑和
神奈川県知事　長洲一二
三重県知事　田川亮三
兵庫県知事　坂井時忠

鳥　取　県　知　事　　平　林　鴻　三
島　根　県　知　事　　恒　松　制　治
広　島　県　知　事　　宮　澤　　弘
沖　縄　県　知　事　　西　銘　順　治
北海道副知事　　寺　田　一寿男
東京都副知事　　野　村　鋠　市
群馬県副知事　　横　田　博　忠
富山県副知事　　巣　山　庄　司
愛知県副知事　　鈴　木　礼　治
滋賀県副知事　　前　川　尚　美
京都府副知事　　荒　巻　禎　一
全国知事会事務総長　　松　島　五　郎

が参加した。

この会議には、来賓として、自治大臣後藤田正晴氏、外務政務次官松本十郎氏、在日ソ連邦大使D・S・ポリヤンスキー氏も出席した。

双方は、この会議において、日ソ両国の文化友好関係の一層の発展について、ならびに日ソ間の貿易および経済交流の促進についての諸問題について深く広範にわたつた討議を行つた。

双方は、幅広い交流が両国民間の相互理解と友好平和の増進に貢献するものであることを認め、そのために地方行政レベルにおいても努力が必要であることを表明する。

会議参加者は、日本とソ連邦との間の真の友好善隣関係を促進する行動がとられることの重要性を強調し、このために努力することの大きな意義を確認した。

日本都道府県知事とソ連邦地方・州人民代議員ソビエト執行委員会議長との次回の定例会議は、1981年にソ連邦において開催される。

ソ連側代表団は、東京滞在中、自治大臣後藤田正晴氏、農林水産大臣武藤嘉文氏、通商産業大臣佐々木義武氏、内閣官房副長官加藤紘一氏、外務事務次官高島益郎氏ならびに衆議院副議長岡田春夫氏と会見した。

ソ連側代表団は、日本国内の旅行をし、東京都、京都府、奈良、鳥取、島根、神奈川の各県を訪問した。

代表団は、放送局、大学等の文化教育関係施設、製鉄、弱電等の製造工業、個人農家、商店街、卸売市場、その他各種の施設を視察し、日本国民の生活に接した。また、それぞれの訪問都府県の知事、副知事、議員、各界の指導者と会合を持つた。

ソ連側代表団は、同代表団の日本滞在中に示された関心と歓迎に対し心からの感謝を表明した。

1979年11月24日

日本全国知事会会長
奈良県知事
奥田良三

ソ連邦代表団団長
モスクワ州執行委員会議長
N・T・コズロフ

「ロシア語」

「ロシア語」

「ロシア語」

「ロシア語」

「ロシア語」

4. ソ連知事団メンバーの略歴

ニコライ・チモフェービッチ・コズロフ

NIKOLAI　TIMOFEEVICH　KOZLOV

モスクワ州人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）

〔生年月日〕　1925年12月19日（53歳）

〔出 生 地〕　サラトフ州

〔民　　族〕　ロシア人

〔現　職〕　モスクワ州執行委議長（1963年1月以降）、ソ連最高会議代議員（1966年6月以降）、連邦会議法案委書記（70年現在）

〔党　歴〕　1946年入党、1953～58年地区党委第2書記、1959～60年モスクワ州党委部長、1960～63年同州党委書記、1966～71年党中央委員候補、1971年以降中央委員

〔職　歴〕　1952～53年機械・トラクター・ステーション副所長、1958～59年モスクワ州統計局長、1960年モスクワ州執行委第1副議長

〔学　歴〕　カ・ア・チミリャゼフ名称モスクワ農業アカデミー卒業（1952年）

〔軍　歴〕　1943～47年軍勤務

ウラジーミル・ビジャエビッチ・サガノフ

VLADIMIR　BIZJYAEVICH　SAGANOV

ブリヤート自治共和国閣僚会議議長（首相）

ブリヤート自治共和国最高会議代議員

〔生年月日〕　1936年3月11日（43歳）

〔出 生 地〕　ブリヤート自治共和国

グリゴリー・エフィモビッチ・ポドガエフ

GRIGORII　EFIMOVICH　PODGAEV

ハバロフスク地方人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）

〔生年月日〕　1920年7月9日（59歳）

〔出　生　地〕　ハバロフスク地方ハバロフスク市

〔民　　族〕　ロシア人

〔現　職〕　ハバロフスク地方執行委議長（1970年以降）、ソ連最高会議代議員（1966年6月以降）、民族会議立法提案委員会委員（75年現在）

〔党　歴〕　1942年入党、1945～58年地方委指導員、地区党第1書記、1958～61年ハバロフスク地方党委部長、同市党委第1書記、1961～70年ユダヤ自治州執行委議長、同州党委第1書記

〔職　歴〕　1940年科学技術専門家、熟練工、工場班長

〔学　歴〕　トムスク工業大学、党中央委付属高等党学校卒業

〔軍　歴〕　1942～45年軍勤務（第2次世界大戦参加）

ドミトリー・イワノビッチ・カラバノフ

DMITRII　IVANOVICH　KARABANOV

沿海地方人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）

沿海地方ソビエト代議員

〔生年月日〕　1927年5月13日（52歳）

〔出　生　地〕　アルタイ地方

ユーリー・イワノビッチ・ロマキン

YURII　　IVANOVICH　　LOMAKIN

ボルゴグラード州人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）

ロシア連邦共和国最高会議代議員

〔生年月日〕　1928 年 5 月 17 日（51 歳）

〔出　生　地〕　ボルゴグラード州ボルゴグラード市

ニコライ・ステパノビッチ・アレクサンドロフ

NIKOLAI　　STEPANOVICH　　ALEKSANDROV

サラトフ州人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）

ロシア連邦共和国最高会議代議員

〔生年月日〕　1926 年 12 月 6 日（52 歳）

〔出　生　地〕　クイビシュフ州

ウラジーレン・ワレンチノビッチ・ニキーチン

VLADILEN　　VALENTINOVICH　　NIKITIN

チユメニ州人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）

ソ連邦最高会議代議員（国会議員）

〔生年月日〕　1936 年 9 月 30 日（43 歳）

〔出　生　地〕　オムスク州オムスク

1979 年 4 月の第 10 期ソ連最高会議第 1 会期で民族会議の住宅・公共事業生活サービス委議長に選出されている。

チーホン・ステパノビッチ・スシコフ
TIKHON　STEPANOVICH　SUSHKOV
ウラジーミル州人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）
ロシア連邦共和国最高会議代議員
〔生年月日〕　1918年12月7日（60歳）
〔出　生　地〕　リペツク州

アレクセイ・フィリツポビッチ・ポノマリョフ
ALEKSEI　FILIPPOVICH　PONOMAREV
ベルゴロド州人民代議員ソビエト執行委員会議長（知事）
ベルゴロド州ソビエト代議員
〔生年月日〕　1930年8月21日（49歳）
〔出　生　地〕　ベルゴロド州

ボリス・アレクサンドロビツチ・ボロージン
BORIS　ALEKSANDROVICH　BORODIN
ソ連邦科学アカデミー極東研究所先任研究員（代表団顧問）
〔生年月日〕　1932年5月24日（47歳）
〔出　生　地〕　イワノボ州イワノボ市

ワレンチン・ウラジミーロビッチ・コルィチェフ
VALENTIN　VLADIROVICH　KOLYCHEV
全ソ輸出入公団「ダリイントルグ」総裁
〔生年月日〕　1936年2月15日（43歳）
〔出　生　地〕　ブリヤンスク州ブリヤンスク市

セルゲイ・ペトロビッチ・ハーリン

SERGEI　PETROVICH　KHARIN

全ソ対外友好文化交流団体連合会極東部長（代表団事務長）

〔生年月日〕　1923年10月1日（56歳）

〔出生地〕　オレンブルグ州

5. ソ連知事団メンバーの州・地方・自治共和国概要

モスクワ州（Moskva）

〔面　　積〕　4万7,000平方キロメートル（九州の1.1倍）

〔人　　口〕　622万7,000人（1978. 1. 1現在）

（モスクワ市の人口含まず。）

〔州　　都〕　州庁所在地はモスクワ（人口781万9,000）

〔地勢・気候〕　地勢は大体低平で、北西部と西部が高い（最高点300*m*）。南部にモスクワの炭田があり、1930年代までは首都のエネルギーの大半を供給した。森林は全土の40%を占める。

平均気温は1月は－10～－11℃、7月は＋17～＋18℃、年降水量は500～650*mm*である。

〔産　　業〕　モスクワ周辺の小都市で機械、繊維、食品加工などの工業が行われている。

農業では野菜、果樹栽培、乳牛の飼養が盛んである。

〔交　　通〕　モスクワから11の方向に放射する鉄道、モスクワから60キロメートル圏を取り巻く環状鉄道などが発達している＝（鉄道の総延長2,600Km）また、モスクワ川、モスクワ運河によりボルガ川とも結ばれる。

〔そ　の　他〕　ノギンスク、オレホボズーエボ、＝ドリスク、コロムナ、セルブホフなどの都市があり、モスクワ北東のザゴルスクは聖地として知られている。モスクワ市と東京都とは友好都市提携について交渉中である。

ブリヤート自治共和国（Buryat）

〔面　　積〕　35万1,300平方キロメートル（日本全土の93%）

〔人　　口〕　89万6,000人（1978．1．1現在）

〔首　　都〕　ウランウデ Ulan-Ude（人口30万8,000）

〔地勢・気候〕　東シベリア、バイカル湖東岸、南岸、東サヤン山脈北麓を占める。大部分が標高500メートル以上の高地で、ザバイカル山地（2,000メートル級）や東サヤン山脈（3,000メートル級）も広い面積を占める。気候は激しい大陸性気候で、年降水量は平地で300　400*mm*。

〔産　　業〕　牛、羊の飼育が盛ん。農業はおもにセレンガ川の谷で行われ、春まき小麦、バレイショ、テンサイなどを栽培。

ザバイカル山地では木材搬出が行われ、イルクーツクに集められる。

木材加工、食品加工、機関車、車両の製造、タングステン、モリブテンの精錬などが主要工業。

〔交　　通〕　鉄道の総延長は646Km、自動車道路は10,500Kmをこえ、水路は約1,700Km、国内航空路線の延長は1万Km以上ある。

〔そ　の　他〕　先住民族のブリヤート人(モンゴル族)約13.6万人が住み、遊牧を生業とする。

首都ウラン・ウデと留萌市とは1972年友好都市となった。

ハバロフスク地方（Khabarovsk）

〔面　　積〕　82万4,600平方キロメートル（日本全土の2.2倍）

〔人　　口〕　158万3,000人（1978．1．1現在）

〔首　　都〕　ハバロフスク（人口52万4,000）

〔地勢・気候〕　オホーツク海西岸沿いのジュグジュル山脈、中央部のブレヤ山脈、タタール海峡～日本海西岸沿いのシホテアリニ山脈などの山地が大部分を占める。山地部は濃密なタイガ地帯で未開発。月平均気温は1月－20～－25℃。年降水量500～900*mm*。

〔産　　業〕　石炭、鉄、マンガン、錫、金などが採掘されるが、まだ産出量は少い。

アムール川流域では木材加工、製紙業などが行われ、オホーツク海、日本海沿岸では漁業が盛んで、水産加工が行われる。

重工業はハバロフスク、コムソモリスクに集中している。

農産物は小麦、カラスムギ、大豆、バレイショなどを産し、畜産のうちには原住民のトナカイ飼養もある。

〔交　　通〕　鉄道はシベリア鉄道幹線が南部を通り、支線をあわせ総延長は1,924Kmある。水路の総延長は2,900Kmである。

〔そ　の　他〕　<u>ハバロフスク</u>

ハバロフスク地方南部、アムール川東岸に位置する都市。

ソ連、極東で最大の都市で、1658年探検家E・ハバーロフにより要塞が設置され、1858年町が建設された。機械、金属、造船や製材、衣服、食品などの工業の中心地。シベリア鉄道の主要駅で、国際空港（新潟との間に定期便がある）、河港が設置されている。郊外に日本人墓地がある。1965年新潟市と友好都市提携をした。

沿海（プリモーリエ）地方（Primore）

〔面　　積〕　16万5,900平方キロメートル（本州の72%）

〔人　　口〕　200万8,000人（1978．1．1現在）

〔首　　都〕　ウラジオストク（(Vladiostok)（人口53万6,000）

〔地勢・気候〕　ソ連邦極東の南部、日本海をへだてて北海道西岸と対する地方。東部が日本海岸に沿うシホテアリニ山脈、南西部がハーンカ湖沿いの低地になっている。主要な川にウスリー川がある。森林が面積の3分の2を占める。

気候は冷涼なモンスーン気候で、冬は寒く乾燥する。ウラジオストクでは1月平均気温－14℃、ウスリースクで－19℃。年降水量は平野部で600*mm*。

〔産　　業〕　ウスリー川の広い谷で農業が行われ、大豆（耕地の5分の1を占める）、小麦、カラスムギ、バレイショ、トウモロコシなどを産し、ハンカ湖周辺では水稲も収穫され、世界の稲作の北限。

鉱産は豊かで褐炭、鉛、亜鉛、錫等は重要。

沿岸ではカニ、タラ、ニシンなどの漁獲が多く、ナホトカ、ウラジオストクなどには水産加工場が置かれている。

林業も発達し、各所に木材コンビナート（一貫加工産業）が建設されている。

〔交　　通〕　この地方の西部をシベリア鉄道幹線が通り、それに平行して自動車道路（ハバロフスク・ウラジオストク線）がある。ウスリー川とハンカ湖は水運に利用され、ウラジオストクとナホトカは海上交通の中心。

〔そ　の　他〕　ナホトカ Nakhodka（人口12万9,000）

沿海地方南部の港湾都市。ウラジオストクの東約 100Km。1859 ロシア船アメリカ号が漂着して発見され、第 2 次大戦中、連合軍の援助物資の荷揚場として発展した。戦後日本軍の捕虜引揚港として利用されたが、現在は日本との貿易の中心地。ダリイントルグ、日本総領事館などが置かれている。1961 年舞鶴市、1966 年小樽市と友好都市提携。

ボルゴクラード州（Volgograd）

〔面　　積〕　11万4,100平方キロメートル（北海道の1.4倍）

〔人　　口〕　247万2,000人（1978．1．1現在）

〔州　　都〕　ボルゴグラード（人口93万1,000）

〔地勢・気候〕　ボルガ川の西岸は100～300*m*の丘陵地帯、東岸は数十メートル前後の低平な平野が占め、州の面積の83%はステップである。

平均気温は1月は－8～－12℃、7月は＋22.5～＋25℃、年降水量は南東部で270*mm*、北西部では425*mm*である。

〔産　　業〕　小麦をはじめとする農産物の栽培が盛んである。とくに瓜類の収穫はロシア共和国で第2位を占める。牧畜も盛ん。

石油、天然ガスも産出し、ボルゴグラード周辺では重工業も発達。ボルゴグラードから西部のドン川へ、ボルガ・ドン運河が通じ、ボルガ川をせきとめた大水力発電所がある。

〔交　　通〕　鉄道の総延長は1,641Km、自動車道路は18,600Kmである。水路はボルガ・ドン運河の開通によって便利になった。

〔そ　の　他〕　<u>ボルゴグラード</u>

1589年にツァリツィン要塞が建設され、やがてボルガ川～ドン川の物資集散地として繁栄。第2次大戦中（1942～43）ドイツ軍との激戦で市街は完全に破壊された。戦後ボルガ・ドン運河の起点となり、250万キロワット時の出力を持つ発電所が開設されて以来一層発達した。1972年広島市と友好都市提携。

サラトフ州（Saratov）

〔面　　積〕　10万2,000平方キロメートル（北海道の1.2倍）

〔人　　口〕　254万7,000人（1978．1．1現在）

〔州　　都〕　サラトフ（人口85万6,000）

〔地勢・気候〕　地勢は州を貫流するボルガ川を境に大きく変化する。右岸地域は大半をステップ性の植生におおわれるボルガ川沿岸高地が占め、左岸地域は低い波状地が広がる。

気候は大陸性で、月平均気温は1月－12℃、7月21℃、年降水量は380*mm*程度。

〔産　　業〕　州都サラトフの周辺で大量に天然ガスを産し、パイプラインによって遠くモスクワへまで送られるが、州内の産業もこれとともに興り、精油、化学、機械、木材加工、食品加工などの工業が盛んとなっている。

農業では小麦、トウモロコシを主にヒマワリ、カラシナ、メロン、芋類などの栽培が行われる。東部では乳牛、羊の牧畜が盛んである。

〔交　　通〕　交通はサラトフを結節点に、鉄道（延長1,600Km）、自動車道路（2,000Km）が東西南北に延びる。

〔そ　の　他〕　<u>サラトフ</u>

現在ソ連で指折りの美観都市のひとつに数えられ、観光客がよく訪れる。

1590年この地に要塞が建設されたのが町の起源。

18世紀にはボルガ川の河港として栄えた。1870年代にモスクワから鉄道が延び、さらに第2次大戦中天然ガスの産出によりガス化学工業、石油精製などの産業が急激に興った。

チ　ユ　メ　ニ　州（Tyumen）

〔面　　積〕　143万5,200平方キロメートル

（ソ連最大の州で、日本全土の面積の3.8倍）

〔人　　口〕　175万人（1978．1．1現在）

〔州　　都〕　チユメニ（人口34万7,000）

〔地勢・気候〕　西シベリア低地にあって一般に低平であるが、西部はウラル山麓に入る。西部と南部にはオビ川が流れる。州の面積の21％は森林で、北部はツンドラになっている。湖と湿地が多い。気候はきびしく、冬は南部で年9か月、北部ではもっと長く続く

〔産　　業〕　最大規模の地下資源（石油と天然ガス）が1960年代から開発され始めた。

林産も盛んで多くの木材を産出する。

農業は主に南部で行われ、小麦、ジャガイモ等を多く産する。

畜産では牛、豚、羊のほか、北部ではトナカイが約50万頭飼育されている。毛皮も重要な産物である。

〔交　　通〕　鉄道の総延長506Km。オビ川、イルトゥイシ川、トボール川は水運に利用され、オビ湾には外洋船が出入する。

〔そ　の　他〕　<u>チュメニ</u>

1580年コサックの一隊がここに冬営地を設け、85年にチュメニ砦を建設したことに始まる。ロシア本国からシベリアに入る門戸にあたり、繁栄したが、シベリア鉄道開通後チエリヤビンスクに繁栄を奪われた。

<u>チュメニ油田</u>

ソ連で開発途上の大油田。原油可採埋蔵量は数十億キロリットル。

ウラジーミル州　(Vladimir)

〔面　　積〕　2万9,000平方キロメートル（四国の1.5倍）

〔人　　口〕　156万6,000人（1978．1．1現在）

〔州　　都〕　ウラジーミル（人口28万4,000）

〔地勢・気候〕　ボルガ川流域のクリヤージマ川に沿う丘陵（北西部）と低地の地方で、南部は広い湿地。森林が全面積の40%を占め、あとはよく開拓された農地が広がる。

平均気温は1月は－11℃、7月は＋18℃、年降水量500～550*mm*である。

〔産　　業〕　「中央工業地帯」の一部をなし、綿と亜麻を主とする繊維製品、トラクター、自動車部品、ラジオ、テレビ、木工品などの生産が盛んである。

北西部が主な農業地域で、ライムギ、カラスムギ、牧草、バレイショのほか、野菜、酪農製品などの産がある。

〔交　　通〕　鉄道の総延長は965Km（うち361Kmが電化区間）、自動車道路は2,517Kmである。オカー川とクリャージマ川は下流の部分が航行に利用されている。

〔そ　の　他〕　<u>ウラジーミル</u>

市は12世紀に建設されたロシアの古都で、ロストフ公国の南東部辺境の要塞であったが、のち政治、宗教、文化の中心となった。現在も「金の門」、ウスベンスキー寺院（1158－61)、ドミトロフ寺院（1193－97）が残されており、壁面のフレスコ画は有名。

ソビエト時代にウラジーミルは工業の中心地となりトラクター、自動車部品、化学などの工場がある。

ベ　ル　ゴ　ロ　ド　州　(Belgorod)

〔面　　積〕　2万7,600平方キロメートル（四国の1.5倍）

〔人　　口〕　128万3,000人（1978．1．1現在）

〔州　　都〕　ベルゴロド（人口22万7,000）

〔地勢・気候〕　中部ロシア高地の南西部にあり、地勢は平らであるが多くの谷によってきざまれ、東部では面積の10%以上もある。

平均気温は1月－8℃、7月＋20℃。年降水量は420～590*mm*である。

〔産　　業〕　農業が盛んで、冬及び春小麦、大麦、とうもろこし、テンサイ、ヒマワリを多く産する(テンサイはロシア共和国で第4位)。

1950年代に大規模な鉄鉱床が発見され、現在大規模な露天掘りが行われている。

また、この地は古くから白亜の採掘が盛んである。

〔交　　通〕　鉄道の総延長は711Km。自動車道路の幹線モスクワ・シンフェローポリ線がこの州を通っている。

〔そ　の　他〕　<u>ベルゴロド</u>

1636～38年に、ロシアの南部辺境を守るため、防衛拠点として設定されたのに由来する。第2次大戦の際ドイツ軍に占領されていた。この地は古くから白亜の採掘がさかん。

6．ソ　連　邦　行　政　区　画　図　（州、地方、自治共和国のレベル）

写真あり

ロシア連邦共和国

1　レニングラード
2　ノブゴロド
3　カレリア（自共）
4　ヤロスラブリ
5　モスクワ
6　スモレンスク
7　イワノボ
8　ウラジーミル
9　カルーガ
10　ブリャンスク
11　マリ（自共）
12　チュバシュ（自共）
13　モルドワ（自共）
14　ペンザ
15　リャザン
16　トゥーラ
17　オリョール
18　クルスク
19　ウドムルト（自共）
20　タタール（自共）
21　ウリヤノフスク
22　タンボフ
23　リベツク
24　ボロネジ
25　ベルゴロド
26　クィビシェフ
27　サラトフ
28　ボルゴグラード
29　ロストフ
30　アストラハン
31　カルムィツク（自共）
32　スタブロポリ（地方）
33　カバルジノ・バルカラ（自共）
34　北オセチア（自共）
35　チェチェノ・イングーシュ（自共）
36　ダゲスタン（自共）

ウクライナ共和国

37　ボリンスク
38　ロブノ
39　ジトミール
40　キエフ
41　チェルニゴフ
42　スームィ
43　ハリコフ
44　ボロシーロフグラード
45　ドネック
46　ドニエプロペトロフスク
47　ポルタバ
48　チェルカッスィ
49　ビンニツァ
50　フメリニック
51　チェルノポリ
52　リボフ
53　イワノ・フランコフ
54　ザカルパート
55　チェルノビツ
56　キロボグラード
57　ザポロジェ
58　ヘルソン
59　クリミア
60　ニコラエフ
61　オデッサ

白ロシア共和国

62　ビーチェブスク
63　ミンスク
64　グロドノ
65　ブレスト
66　モギリョフ
67　ゴメリ

ウズベク共和国

68　アンディジャン
69　ナマンガン
70　フェルガナ
71　タシュケント
72　ジンザク
73　スィルダリン
74　サマルカンド
75　スルハンダリア
76　カシカダリア
77　ホレズム

グルジア共和国

78　アブハーズ（自共）
79　アジャール（自共）

アゼルバイジャン共和国

80　ナヒチェバン（自共）（飛び地）

キルギス共和国

81　イシク・クリ
82　ナリン
83　オシ

タジク共和国

84　クリヤーブ州
85　クルガン・チュビンスク
86　レニナバード